

ヘンデル

GEORGE FRIDERIC HANDEL

クリスティーナ・ホグウッド
CHRISTOPHER HOGWOOD

三澤寿喜・訳
TOSHIKI MISAWA

東京書籍

日本語版への序文

3 1

1 ハレとハンブルク 1685—1706

幼年期——ほとぼる才能 21

師ツアハワ 28

天才音楽家の予感 30

テレマンとの交友 34

ハンブルクへ——オペラへの傾倒 37

マッテゾンの影響 40

オペラ《アルミラ》 44

カイザーの恩恵 48

19

2 イタリア時代 1706—1710

イタリア入り 55

コレッリの影響 58

オラトリオ《時と悟りの勝利》 60

バトロ、ルスボーリ侯爵 62

イタリア・オペラ上演——《ロドリゴ》 65

53

莊厳を極めた《復活》 66
ナポリへ——《アーチとガラテアとボリフェーゼ》 74
アルカディアのためのカンタータ 75
知られざる初期作品群 79
オペラ《アクリッピナ》——イタリア時代の集大成 81
ハノーヴァー宮廷楽長 85

3 ロンドン・オペラの最盛期 1710—1728

89

イギリス人 91

ボノンチーニのオペラ《カミッラの勝利》 93

イタリア・オペラのロンドン進出 95

翻訳ものの落とし穴 100

オペラ《リナルド》——ロンドン・デビュー作 102

自学自修の決意 107

再びイギリスへ——《忠実な羊飼》と《テーゼオ》 110

バーリントン邸 113

イギリス王室のための第一作 115

興行不振と劇場閉鎖 117

《水上の音楽》 121

キャノンス邸——《シャンドス・アンセム》 123

《エーシスとガラティア》と《エステル》 127

「ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック」設立 131
 アカデミーの芸術的勝利 135
 《ラダミスト》の成功 140
 ライヴアル、ボノンチーニ 143
 充実の日々——《ジューリオ・チェーザレ》 145
 クッソーニとファウステイーナ 150
 幕を閉じたロイヤル・アカデミー 155

4

ロンドン…オペラの衰退期 1729—1737

新たなロイヤル・アカデミーに向けて 163
 不評の船出 167
 セネジーノ復帰 171
 熱狂で迎えられた改訂二作《エーシスとガラティア》《エステル》 175
 イギリス・オペラ支援運動の中の孤立 181
 「貴族オペラ」設立——セネジーノらの離反 189
 オックスフォード学位授与式——オラトリオ《アタリア》 197
 新陣営で「貴族オペラ」に対抗 201
 ウェールズ皇太子の立場 205
 コヴェント・ガーデンへ——オペラ《アリオダンテ》《アルチーナ》 214
 新機軸《アレクサンダーの饗宴》 223
 王室のための結婚オペラ《アタランタ》 230

脳卒中 234

5

ロンドン…オラトリオ 1737—1759

対立・抗争の中での創作再開 245
 キャロライン王妃の葬送アンセム《シオンに至る道は悲しみ》 253
 負債 258
 ヴォクソール・ガーデンの立像 262
 難産の《サウル》 268
 試行錯誤のオラトリオ上演——《エジプトのイスラエル人》 272
 コンチェルト・グロッソ集作品六 279
 度重なる不運 285
 《メサイア》完成 296
 ダブリンの熱狂——《メサイア》初演 304
 オラトリオへの決意 317
 ジェネンズの《メサイア》批判 327
 新作に対するディレイニー夫人の評価——《セメレ》 334
 ジェネンズとの和解——《ベルシャザル》 339
 予約シリーズの中断 345
 ジャコバイト党の反乱 354
 モーレルと三つのオラトリオ 362
 ヘンデル・オラトリオの普遍性 370

《王宮の花火の音楽》 375
 捨子養育院 383
 失明——《イエフタ》 392
 辞世 401

6 ヘンデル、その受容

遺産

417

生誕百年祭

421

偶像ヘンデル

442432

モーツァルト

ハイドンとベートーヴェン

446

ヘンデル・オラトリオの宗教性

450

欧米各地のヘンデル熱

455

大イヴェント化の「ヘンデル・フェスティヴァル」

463

借用

468

ヘンデル・オペラの復活

473

作品に生き続ける本質

482

原註
 訳註

497489

訳者あとがき

508

関連地図

図版リスト

参考文献

ヘンデル年譜

ヘンデル作品索引

事項索引

人名索引

2 29 37 43 72 76 79

ヘンデルの体つきは大きく、いくぶん太りすぎて、動作は鈍かった。しかし、その表情は、情熱と威厳に満ちていた。そのことは昨日会ったばかりのようによく覚えていた。非凡で卓越した心に残る彼の楽想も同様だった。態度や話しぶりは性急で粗野で横柄だったが、悪意や意地悪さは微塵も感じられなかった。

(チャールズ・バーニー、一七八五年)

一七三七年十月二十八日の『ザ・デイリー・ポスト』は、ヘンデルのことを「イタリア音楽の作曲家」と呼び、その十日後には「健康は見事に回復された」と書いているが、自宅に戻ったヘンデルは、生涯で初めて、自分が始まったばかりのオペラ・シーズンの部外者になっていることを思い知らされた。

この年の夏から実施された「事前許可制法」により、二つのパテント劇場、コヴェント・ガーデンとドゥルリー・レーン(音楽以外の)芝居興行の独占権を与えられた。ジョン・リッチは弱小劇場の解体につけ込み、コヴェント・ガーデンのためにパーレスク・オペラ《ウォントリーの竜^{註5} The Dragon of Wantley》を獲得した。自分の損害を埋め合わせるため、劇場を満員にすることのできる音楽的なアトラクションを確保したのである。このオペラは最初のシーズンで《乞食オペラ》よりも七回多い六十九回の上演を数え、イタリア・オペラの棺にとどめの杭を打ち込むことになった。

ヘンリー・ケアリーによるその台本は、下劣な出来事を扱ったもので、音楽は(レチタティヴ^{註6}も含めて)すべてジョン・ランベが作曲した。ケアリーはその序文に「我々はこの作品を作りながら、イタリア・オペラで流行しているナンセンスのもつ美しさを英語で示そうと、言葉やシラブル、同音反復語を切り刻み、組み変え、そぎ落とし、新しく造り出したりして、何時間も楽しんだ」と書いている。これは大まかにいえばイタリア・オペラ全体に当てつけたもので、とくにヘンデルの《ジュステイノ》を標的にしたものであった。タイトルのドラゴンはヘンデルの《ジュステイノ》に現れる海の怪物を茶化したもので、その役はヘンデルのレギュラー・バス歌手の一人、ラインホルドが歌った。しかし、台本には「シニョール・フリオゾ」としか記載されなかった(彼の本名は伏せられていた)。

バーニーはこの曲を「ユーモアのある素晴らしい作品」と評価しているし、国王も何回か劇場に足を運び、病床のキャロライン王妃にドラゴンの道化ぶりを長々と語って聞かせては、彼女の気を紛らせようとした。また(若きウェントワース卿が父親に宛てた一七三八年一月十四日付の手紙によれば)「ヘンデル氏さえもが、その音楽は実によく作曲されていると認めている」という。

キャロライン王妃の葬送アンセム《シオンに至る道は悲しみ》

ハイマーケットでは、崩壊した貴族オペラ経営陣の最後の生き残りであり、オペラ専門家のハイデッガーが、バステイチ^{註7}《アルサーチ Arsace》で新しいシーズンを開幕した。シャフツペリーは「ハイマーケットの紳士達」という表現を用い、マナリングは新しい取締役としてミドルセックス卿の名を挙げてはいるが、ハイデッガーはこのシーズンを自分自身の資金で起こしたものと思われる。

ハイデッガーはこの年の夏限りでロンドンを去ってしまったファリネッリに代わり、傲慢なカップアレツリを起用した。当時の記録によれば、彼は偉大な歌手と記されている。しかし、気まぐれで、手に負えないほど横柄であり、後にイタリアでは、下品な動作で舞台上のブリマ・ドンナを辱しめたために刑務所に入れられたこともある。ハイデッガーは劇場付き作曲家としてベシエッティ^{註8}を任命したが、フル・シーズンを彼に任せきるつもりはなかった。むしろ、ヘンデルがこの挑発に耐えられなくなることを期待していたにちがいない。

自宅に戻って二週間とたたないうちに、ヘンデルはハイデッガーとの間で、彼の会社に新作オペラ二曲とバスティッチョ一曲を作曲し、千ポンドの報酬で音楽監督を務めるという契約を取り交わしている。これに対してカップアレツリは千ギニー、プラス旅費百五十ギニーを受け取っている。十一月十五日、ヘンデルは《ファラモンド Faramondo》の作曲にとりかかった。しかし、十一月二十日にキヤロライン王妃が亡くなると、予定されたすべての上演が突然中止となった。劇場は六週間の服喪期間中、閉鎖された。

王妃の死はヘンデル個人にとっても大きな痛手であった。二人は彼女がまだアンスバッハのキャロラインといわれていた十一歳のころからの知り合いだった。一七一年にはハノーヴァーでジョージ・アウグストの花嫁となっていた彼女のために、ヘンデルは何曲かのデュエットを作曲している。^{註9}イギリスでの王妃は誠意をもってヘンデルを支援した。娘達とともに彼のオペラに出資し、彼を音楽教師に雇い、彼を介して夫と息子の対立をできる限り和らげようと試みている。

ホーキンスによれば、国王が葬送アンセムの作曲を依頼したのは十二月七日、ヘンデルが《シオンに至る道は悲しみ The Ways of Zion do Mourn》を完成したのは十二月十二日のことであった。十

四日には王族達のお忍びの臨席を得て、ホワイトホールのバンケティング・ハウス・チャペルでリハーサルが行われたが、ジョン・ロックマンはヘンデルの音楽とルーベンスの天井画の組み合わせにすっかり魅了されてしまった。

故王妃の告別式のためにヘンデル氏が作曲したアンセムの（ホワイトホールのバンケティング・ハウスにおける）リハーサル後に書ける

魔法の色彩の織りなす美しさに心打たれ

恍惚とした眼差しは群れから群れへと舞いゆく。

熾天使の言葉が柔らかに調べに満ちた悲しみとなって

厳かに、奥深く、そしてゆったりと耳の中に溶けゆくまで。

互いに競い合う二つの芸術はそれぞれの魅力を発散し

無我となったこの感覚を甘やかに包み込む。

どちらとも決めることなく、代わるがわるの称讃の言葉を送らねばならぬ

真に迫る絵筆と、雄弁な豎琴とに。

（『オールド・ホイッグ Old Whig』一七三八年一月四日）

このアンセムの演奏には、ヘンデルが重要な国家的行事や屋外での式典用に編成した大規模な楽団と合唱団が用いられた。すなわち、「約八十人の歌手と、宮廷楽団やオペラなどから百人の器楽奏者

が集められた」(『三文文士ジャーナル The Grub-Street Journal』一七三七年十二月二十二日)。戴冠式とき同様、このときもリハーサル時間が限られていたために、実際の演奏も厳しいものになった。十二月十七日、ウェストミンスター・アベイのヘンリー七世礼拝堂で行われた式は、その翌日、シャンドス公爵が甥に宛てた手紙の中で、次のような批判的なコメントを書かざるを得なくなるほどのものであった。

敵かにとり行われた王妃の葬儀は実に立派で、私がこれまで経験したこの種の式典のどれよりも整然としていた……式は七時十五分前に始まり、十時少し過ぎに終わった。アンセムの演奏は四十分かかった。作品は大変素晴らしく、悲しい式典には誠にふさわしいものだった。しかし、演奏そのものについては語る気にもなれない。

この長大なアンセムは様々な点でヘンデル(および王妃)のルター主義を表している。たとえば、ドイツでは葬送音楽として未だに変わることなく用いられているヤーコプ・ハンドルのモテト《正義の人がいかに死んだかを見よ *Ece quomodo morior justus*》が引用されていたり、(助けを求める貧しき者を救いたまえり *She deliver'd the poor that cried*)の部分にはコラルの旋律(汝、平和の主、イエス・キリスト *Du Friederich Herr Jesu Christ*)をそのまま引用したりしている。しかしまた、ギボンズの影響が最も顕著に窺える(彼らの体は安らかに葬られたり *Their bodies are buried in peace*)の部分の和声進行は衝撃的である。この作品にはイギリス古来の教会音楽のもつ厳肅さも具わっている。注目すべきは、ヘンデルが、自身も深い悲しみの中にありながら、伝統的でオペラ的な悲

しみの表現を完全に避けている点である。国家的な悲嘆を表すには、憂いを帯びた非和声や手の込みすぎた半音階的下行音型は好ましいことではなかった。同様の理由から、彼は独唱の使用も避けている。ただ、後にこの作品を改作する際(たとえば《捨子養育院アンセム》*Foundling Hospital Anthem*)^{註[4]}には、彼はヴァース・アンセムの流儀に倣って、いくつかの部分を独唱に振り当てている。

モリス・グリーン博士は教会用であれ、室内用であれ、けっして格別に素晴らしい作品を書く人物ではなかった。自分が完成したばかりのソロ・アンセムについて、ヘンデルに、目を通して意見を聞かせて欲しいと頼むと、この偉大なドイツ人作曲家から、明朝一緒にコーヒーを飲もうと誘いを受けた。そのときに、意見を述べようというのである。博士は時間どおりに訪ねた。コーヒーがふるまわれ、あれこれと話に花が咲いた。しかし、ヘンデルは作品については一言も触れなかった。とうとう我慢しきれなくなったグリーンは真剣に、そして、最早隠しきれない不安を抱きながら尋ねた。「ところで先生、私のアンセムのことですが——どうお思いでしょうか?」「ああ、あなたのアンタムのことかね——ああ——あれはエアが足りないと思うのだが、グリーン博士」「エアですって、先生?」「そう、エアだよ。だから窓の外に吊しておいたよ」^{註[5]}

て、その進路を変更させられたことになる。

* * *

《メサイア》完成

ヘンデルがオラトリオへ戻るようにと最初に仕向けたのはジェネズであった。七月十日、彼は友人のエドワード・ホールズワースに宛ててこう書いている。^{註14}「……ヘンデルは次の冬はなにもしないと言っていますが、私が彼のために作った聖句に基づくもう一つの台本に曲をつけ、彼自身の利益のために受難週間に演奏するよう、説得できればと願っています。彼が才能と熟練のすべてを傾注し、題材が他のどれよりも卓越しているがごとく、音楽もこれまでの彼のどの作品をも凌駕^{りようが}することを願っています。その題材とはメサイアです……」。

どんなに題材が魅力的であっても、ヘンデルは確信をもてなければ、上演を前提としない作曲をすることはなかった。もしアイルランドからの不意の依頼がなければ、《メサイア Messiah》の台本も《サウル》の台本同様、長い間、手も触れられずに放置されていたことだろう。

アイルランド総督ウィリアム・カヴェンディッシュは、外交官としては目立つ人物ではなかった。ダブリンに対する彼の業績は二、三の建築上の改善に留まっている。もし、地方の慈善事業として、オラトリオによるシーズン開催のためにヘンデルを招致しなかったなら、現在では彼の名はすっかり忘れ去られていたことだったろう。ヘンデルは新しい聴衆に対する期待、慈善が目的であること、(ジェネズが提案したたった一回の慈善演奏会ではなく)数回の演奏会であることなどから勇気づけられ、彼

の最近の世俗音楽の成功作——《陽気の人》、《エーシスとガラティア》、《聖セシリアの日のためのオード》、《アレクサンダーの饗宴》——を含む一連の演奏会を決意するに至った。また、この演奏会の一部としての宗教作品用には即座にジェネズの新しい台本を取り上げ、八月二十二日、《メサイア》の作曲にとりかかった。第一部は八月二十八日、第二部は九月六日、第三部は次の土曜日、すなわち九月十二日に完成した。内声を完成させるのにさらに二日を要したが、作曲開始から完成まで計二十四日であった。

今日の状況から見ると、ヘンデルにとって、《メサイア》の作曲は特異な企画であり、報酬も定かなく、おそらく再演の見込みもなかった、という当時の状況は理解されにくい。それは彼の作曲したまさに唯一の「宗教的」オラトリオであり、彼の生涯中に聖なる建物で演奏された唯一のオラトリオであった。その上、それはジェネズの言葉にあるように、「素晴らしい娯楽作品^{註24}」として作曲されたものでもあった。

この作品は本質的に劇場作曲家のものであるが、演劇的な意味におけるドラマはない。(イスラエル人対ベリシテ人といった)敵対する民族もなく、有名な登場人物もない。テキストは予言とその成就を順に追ったもので、ドラマはほとんど説話によらず推論と報告によって間接的に明らかにされてゆく。

構想は当然のことながら台本作家の責任であるが、ジェネズは時に言われる以上に称讃に価する人物なのである(十九世紀のある口の悪い男は、この台本を書いたのはブリーというジェネズ邸のお抱え教師だと言いつつ張ったことさもある^{註15})。彼は《エジプトのイスラエル人》におけるような極端な合唱使用を避け、《陽気の人》で成功した独唱と合唱の均衡を保つ方法を選んだ。とはいっても、《メサイア》は

《エジプトのイスラエル人》を除くいかなるオラトリオよりも合唱の割合が高くなっている。欽定訳聖書を巧みに翻案し、また、約めながら、新約・旧約の聖書が見事に合成されている。

たとえば 'He is just, and having salvation' (彼は正しき救い主にして) と書き換えたり、^{註25} 'Every valley shall be exalted, and every mountain and hill [shall be] made low; (もろもろの谷は高く、もろもろの山と丘は低くさむ) [and] the crooked [shall be made] straight, and the rough places plain' (曲がれるものは直く、けわしきところは平らかになるべし) ^{註26} (イザヤ書第四十章四節) と約めている (「」内を削除。なによりも重要なのは、ジェネンズが、神の計画、すなわち予言から降誕、十字架上の死、復活、昇天、罪の贖いの約束に至るまで一貫性のある経緯を、実に明瞭に、かつ確信をもって開示していることである (第三部の詩はほとんど英国国教会の埋葬の式文からとられている)。

このように、この作品はキリスト教会暦のすべての主要な祝祭日を網羅している。ヘンデル自身はこの作品を復活祭と関連づけて上演したが、現代では (とくに北アメリカでは) しばしばクリスマスでの上演の方が好まれている。

ヘンデルは常々見せるような構成上の変更もなく、一気にこの曲を書き上げた。それはジェネンズの構成が完全であることの十分な証左である。《メサイア》作曲の際のヘンデルの速筆は議論の余地がないにしても、彼の「ほとぼるインスピレーション」にまつわる積もり積もった伝説の数々は、いささか信じ難いものがある——召使いの運んできた食事が手もつけられずに運び去られた話、インクに涙がにじんだ話、ヘンデル自身が語ったとされる言葉「私は天国と偉大なる神ご自身の姿とを目の当たりにした」なども作り話であろう。

この種の行き過ぎた突飛な空想に対して、ここではヘンデルがこの主題を扱う際に見せた異常な、しかし、全く正当な慎重深さについて触れておこう。

《メサイア》のオリジナル・オーケストレーションは、弦楽器とたった一回だけ用いられる唯一の独奏楽器 (トランペット) に限られていた。オーボエとバスーンはこの作品がロンドンで上演されるとき、合唱曲の弦楽器声部に終始一貫して重ねるように付け加えられたものである。声楽的な見せ場も少ない——当初、ヘンデルはダ・カーポ・アリアを四曲作ったが、後に二曲に減らしている (彼は侮られ 'He was despised' と「ラッパ鳴りて The trumpet shall sound」の二曲)。他に例を見ないこの二つの特色はある程度、ダブリンの状況に対するヘンデルの無知に起因しているが、ヘンデルはそれを己れの有利になるように利用したのである。劇場的絵画性は慎重によって一層雄弁となる。たとえば、初期上演においては「へもろもろの谷は高く Every valley」のトリルによる二小節の鳥のさえずりは削除されているし、「へいと高きところには神に栄光あれ Glory to God」の天使に合わせて初めて用いられる天のトランペットの象徴性は「遠くから、そして、少し弱く」という指示により一層高められている。当初ヘンデルは「舞台脇で」と指示していた。トランペットは「ハレルヤ」で初めて舞台上に現れることになる。

ヘンデルの創作過程をより詳細に検証してみると、彼の靈感に対する非現実的な神話も一掃される。現在、ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館には、一七三〇年代以降の日付をもつ習作フーガのスケッチがあり、それと並んで《アーメン Amen》フーガのスケッチも所蔵されている。数々の初期スケッチは直接には《メサイア》作曲と結びつくものではないが、それらを並べてみると、ヘンデルが己れの対位法上の才能を《メサイア》の《アーメン》を作曲する中で試してみようと決心していた

様子が窺える。バーニーが指摘しているとおり、ここでは「フーガ主題が分割、細分、反行され、対主題で豊かにされ、和声、旋律、模倣の巧妙で目に見えない幾多の効果に貢献している」。

これほど急いで作曲された作品にしては、驚くほど借用が少ない。最も重要で音楽的にも非常に効果をあげている借用例は自作からのものである。《メサイア》に先立って作曲された彼のイタリア語によるデュエットの合唱への改作がそれである。

軽妙で交唱風な声部処理（「われらみな羊のごとく迷いて All we like sheep／＼その轡はやすく His yoke is easy」／＼彼はレビの子らを清めん And He shall purify」）はこの作品の中で壮大な合唱との貴重なコントラストとなっている。ただし、これらの改作によりいくつかの慣用に反する語強勢が生じたり（「私はお前達を信じたくない No, di voi non vo darmi」を／＼われらにひとりの嬰兒生まれたり For unto us a child is born」へと改作する際^{註27}）、いくつかのいくぶん場違いなコロラトゥーラが生じていることも事実である（「彼はレビの子らを清めん」や／＼その轡はやすく／＼の十六分音符に見られる。原曲の／＼夜明けに微笑む、あの花を Quel fior che all'alba ride」での十六分音符は全く適切であるのに^{註28}）。／＼彼はレビの子らを清めん／＼には、テレマンの《音楽による礼拝 Harmonischer Gottes-Dienst》からの借用も含まれている。その他の疑問のある語強勢をもつ旋律（たとえば／＼われは知る、われを贖うものの生きたまえることを I Know that my Redeemer liveth^{註29}）や／＼ラッパ鳴りて The trumpet shall sound」は、ヘンデルの存命中も修正されるところなく、彼の歌手達によって歌われていた。これらはいずれも会話の際に生じる不都合なのである。言葉の割り振りは些細で局部的な問題であり、ヘンデルが《メサイア》のテキストに対して抱えていた問題のごく一部にすぎなかった。聖句特有の対照法は楽想の並置を必要とすることから、叙事詩には強力に役立つものである。しかし、ヘンデルのそれまでの経験とは無縁のものであった。オペラ

の台本の伝統的な構成や、ミルトンやドライデンの台本における彼の音楽付けにおいては、音楽上のひとつの構成単位がその基盤とすべき観念、あるいは情念はただひとつ与えられるにすぎなかった。ヘブライの詩は一般に反復よりも突然の対照を提示するものであり、ヘンデル自身の音楽上の前提条件やアリア形式の本質と調和しなかったのである。

合唱処理におけるヘンデルの柔軟性は、たとえば／＼われらみな羊のごとく迷いて／＼の最後の部分（しかるに主はわれらすべてのものの不義を And the Lord hath laid on him）における急激な変化にも対応することができた。また、／＼お前よ、汝らの頭をあげよ Lift up your head」に見られる交唱は、彼がごく自然に思い着くアイデアであった。それに比べると、アリアは順応性に欠けていた。たとえば／＼暗きところを歩む民は The people that walked in darkness」における「大いなる光 a great light」という言葉が与えるイメージは詩の雰囲気が変わる度に長調へと転じるといった小手先の処理とはかみ合わない。このアリアは詩の内容にかかわらず、あいにく短調に終止している。^{註16}

しかし、ヘンデルはこのアリアと、続く合唱／＼われらにひとりの嬰兒生まれたり／＼との間に生じた短調から長調へという変化を巧みに利用し、見事に効果をあげている。すなわち、一曲のアリア中に限定されてしまったはずの調性プランを二曲間に拡大しているのである。

ドイツの受難曲の影響は第二部に見られる。その中で群衆を表しているのは二つの合唱（／＼彼は神に拠りたのめり He trusted in God、／＼われらその械をこわし Let us break」）だけである。バーニーが指摘しているとおり、前者は「個人の嘲りや出しゃばりではなく、混乱した群衆の冷笑と侮辱を表している」。

ジョージ三世はバーニーに宛てた「批評文」の中でこの記述に異議を唱えた。その結果、バーニー

はこの曲に対する印象を回復させるための脚注を付すことになった。「彼〔ヘンデル〕はこの曲の素晴らしさを十分認識しており、よく小品として鍵盤楽器で演奏した。彼が即座にはインスピレーションが浮かばないままに演奏をせがまれたとき、彼の心に浮かんできるのはたいいていこの主題であった。即興的なフリーガやヴォランタリーの主題としてこれを用いると、必ずや極めて崇高な楽想が湧き出で、豊かな想像力がほとばしるのであった」。

ヘンデルの手稿譜の乱雑なありさま、そのページの最終小節まで一面を汚しているしみ、消し跡、修正は空想好きな伝記作家達の気をそりそうな激しい作曲ぶりを示している。^(図版38)しかし、ヘンデルは衰弱したり、疲れ切った様子を見せるどころか、《メサイア》完成のわずか数日後には、ダブリンではなくロンドンでの上演用の新作にとりかかっている。

彼の最大のオラトリオ《サムソン Samson》は第一幕が九月二十九日までに完成、全曲は一カ月後に完成した。《サムソン》は《メサイア》とは対照的な作品であり《メサイア》がひき起こす可能性のある批判に対する保険代わりの作品であった。《メサイア》があまりに静観的な作品であったとすれば、《サムソン》は明確な個性をもった登場人物と、交互に歌い交わすペリシテ人とイスラエル人の合唱を含む非常にドラマ性の高い作品である——とはいえ、ヘンデルは合唱にはほどほどの要求しかしていない。《メサイア》が聖句を用いているがために「冒瀆」と宣告されるなら、《サムソン》はミルトンの詩に基づいており、その基盤はるかに安全なものであった。ニューバラ・ハミルトン——《アレクサンダーの饗宴》の台本を翻案した人物——はこの新しい台本について、その序文の中で次のように正当化している。

近ごろ、いくつかのミルトンの作品、なかんずく『ふさぎの人』や『陽気の人』が舞台にかけられ、成功しているが、私の考えるところでは、この非凡な詩人の作品中、劇場で『闘士サムソン Samson Agonistes』以上に敬意と喝采を受ける作品はなからう。彼自身はけっしてこの詩を幕や場に振り分けてはいないし、(序文の中で自ら書いているとおり)舞台での上演も考えていない。ただ、古代の流儀に従って、合唱付きの悲劇と考えていただけである。しかし、幸いにもヘンデル氏がここにオラトリオ、すなわち題材を聖書に求めた音楽劇を広めてくれた。ここでは、教会音楽の厳肅さと劇場舞台のもつ最も心地良い雰囲気とが無理なく結合されている。それゆえ、この大いなる巨匠がこの作品をしかるべく取り上げる機会を逸したとすれば、取り返しのない損失となる。彼はすでに英語という言語による最高の作品、とりわけ、いかなる時代、いかなる国も凌駕し得ないドライデンの最高傑作『聖セシリアの日のためのオード』に新たな生命と魂とを与えている……この詩を舞台用に翻案するにあたっては、レチタティーヴォはほぼ完全にミルトンから採った。その長大な作品の中から、主題の精神を保ち、主題と適確に結びつく最も必然的な部分のみが用いられている。付加することを余儀なくされたアリアや合唱においては、この作品をできる限り統一のとれたものにするため、ミルトンのいくつかの小品から借用した詩行、詩句、表現をここそこに挿入した。原作は娯楽作品としてかなり短く縮小されたが、それでもなお上演には長すぎると思われるので、実際の演奏ではレチタティーヴォをいくつか省略しなくてはならない。台本にはそれらも印刷されているが、それと分かるように印がつけられている。

ドラマの観点に立つと、《サムソン》はそのまま《サウル》の後を受けた作品である。《サウル》同

様、祝祭に始まり、悲歌で幕を閉じている。ミルトンの詩を簡略化し、そこに他の詩（ミルトンの『詩編からのパラフレーズ Paraphrases of the Psalms』や『キリスト生誕の朝に Ode on the Morning of Christ's Nativity』など）からの借用をうき足すことにより、ハミルトンはミルトンの原題から「闘士」を削除し、孤立し、人間的で、哀れな、そして最後には高貴な存在としての英雄を創り上げることに成功している。彼はまた、聖書がけっして認めないひとつの疑問を投げかけ、緊迫感を盛り上げている。すなわち「神は時間に介入するか？」という疑問である。^{註17}

ヘンデルは入念な色彩的楽器法、デリラのシーンの見事な官能性、それに多くの借用によってこのテキストに対応している。借用源はレグレンツィ、テレマン、ムッファトであるが、不思議なほど高い割合でジョヴァンニ・ポルタの《ヌミトーレ》^{註18}から借用している。この二十一年前、ヘンデルのロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックの最初のシーズンの幕開けがこのオペラであった。へ輝かしい天使よ Let the bright Seraphims^{註19}の原形も《ヌミトーレ》に見出すことができる。

ダブリンの熱狂——《メサイア》初演

ヘイマーカー・ケットにおけるミドルセックス卿の派手な新シーズンの幕開けが、おそらくヘンデルに二十一年前の初めてのシーズンのことを想い出させたのであろう。十月二十九日に《サムソン》を完成させたヘンデルは、三十一日には《ベルシアのアレックスサンドロ Alessandro in Persia》^{註20}（ガルツェ編のバステイッチョ）の初演に出かけた。ウォルポールによれば、このとき「熱を出した（テノール歌手）アモレヴォリの役は削除を余儀なくされた」とのことである。

その直後、ヘンデルは喜び勇んでアイルランドへと旅立った（308～309頁を参照）。彼は写譜家ジョン・

クリストファー・スミスを伴い、また、先立つ演奏会シーズン用の楽譜を携えていたことは明らかである。ジェネズは事態の新しい展開を知らされておらず、いくぶん不機嫌にホールズワースにこう書き送っている（一七四一年十月二日）。「町に着くと、ヘンデルが《メサイア》というオラトリオを完成したことを知り、大変嬉しく思いました。しかし、彼がその曲を当地で演奏せず、アイルランドへ持っていったってしまったことはいささか残念でした。彼がここに戻れば、それを聴けるものと期待はしていますが……」。

ダブリンへの道すがら、ヘンデルはチェスターに立ち寄った。バーニーはここで初めてヘンデルに会った。ヘンデルの滞在について彼はこう記している。

私はその町のバブリック・スクールに在学中だった。彼が乗り継ぎのコーヒー・ハウスでコーヒーを飲みながら、パイプを吹かしている姿を大変良く覚えていた。私はこのように並み外れた人物を見ることに大変興味をそそられ、彼がチェスターに滞在中は注意深く観察したものである。パークゲイトを出港するのには風向きが思わしくなかったため、彼の滞在は数日間に及んだ。この間、彼はオルガニストのベイカー氏——私の最初の音楽教師——にこの町の大聖堂には「初見」で歌える聖歌隊員がいるかどうかを問い合わせていた。アイルランドで演奏する予定で大急ぎで編曲した作品のでき具合を試したかったのである。ベイカー氏はチェスターにいるちょうど良い歌手を何人か挙げ、とくにジャンソンという名の印刷職人を紹介した。彼は素晴らしいバスで、聖歌隊員の中でも最高の歌い手のひとりであった……ヘンデルが宿泊していた「ゴールデン・ファルコン」での私的なハ・サルの時間が決められた。しかし、ああ、なんということ！《メサイア》の中の合唱

へその打たれし傷によりて、われらはいやされたり And with his stripes we are healed」を試唱しているときのことである——哀れなジャンソンは何回か挑戦したのち、大失敗をやらかしたのだ。とうとうヘンデルは堪忍袋の緒を切らし、四カ国語で罵ったのち、ブローケンな英語で叫んだ。「この恥さらしめ！ 初見で歌えると言ったじゃないか？」「はい、そうです」と印刷職人は言った。「ですから歌えます。ただ初めての初見では無理です」。

このころ、ダブリンは最も華やかなりしころであり、イギリス諸島第二の町で、芸術の中心であった。ジョンソン博士は一方的な見方ではあるが、「ダブリンはロンドンよりかなりひどいが、アイスランドほど悪くはない」と表現している。ジョンサン・スウィフトはセント・パトリック大聖堂の主任司祭であった（彼が言うように、「頂点に登りつめると、あとは死を待つばかり」ではあったが）。ヘンデルの友人でヴァイオリニスト、マシュー・デューボークは一七二八年以降、アイルランドの州政府付き音楽長であった。この他、ロンドンで名を馳せた多くの音楽家がある時期ダブリンの音楽界と関っている。ジェミニアーニ、マイケル・アーン、ジョルダーニは後にダブリンに住みついているし、トーマス・アーン、カストルッチ（元）、ランベもここに長期滞在している。

ヘンデルはホーリーヘッドからの定期船で十一月十八日にダブリンに到着し、アベイ街に部屋をとった。三日後、「パークゲイトからのヨットでアヴォーリオ女史という素晴らしい歌手が到着した。彼女はヘンデル氏の音楽会で歌うためにこの王国にきたのである」（『ザ・ダブリン・ジャーナル The Dublin Journal』、一七四一年十一月二十八日）。ヘンデルが一連のシリーズ演奏会の準備を進めるかたわらで、『ユトレヒト・テ・デウム』と同『ユビラート』が早くもマーサー病院のための慈善演奏会とし

て、教会の礼拝で「教会の流儀にそって」演奏された。ヘンデルはそこでオルガンを弾くことを引き受けた。このことに関しては病院記録の中でも十分に謝意が表されている。

ダブリンにおけるヘンデルの行動は、その一部始終を新聞ばかりか、彼自身の書簡によって、かなり詳細に再現することができる。ロンドンでの諍い^{いさか}や嫉妬の後だけに、ヘンデルがここでの歓迎ぶりに感激したことは容易に想像できる。ヘンデルの最初の「音楽会」のシリーズは、予約制で十二月に開幕した。フォークナーの『ザ・ダブリン・ジャーナル』はこう報じている（一七四一年十二月十九日）。

来る十二月二十三日の水曜日、フィッシュヤンブル街のニュー・ミュージック・ホールにおいて、ヘンデル氏の音楽会が開かれる。《陽気の人、ふさぎの人、温和の人》に、いくつかの楽器のためのコンチェルト二曲と、オルガン・コンチェルト一曲も併せて演奏される。開演は七時。その晩のチケットは次の火曜日と水曜日に、演奏会場で朝九時から午後三時まで（予約券持参の場合のみ）予約者に引き渡される。——本日と次の月曜日には、ライファイ街近くのアベイ街にあるヘンデル氏宅で、朝九時から午後三時まで、予約金受領のための係員が手配される。そのときに予約者各人にはチケットが手渡されるが、そのチケットはご婦人でも殿方でも毎晩三人までの入場の権利を保証するものである。——注意。予約は同所でも受け付ける。台本は同所において六イギリス・ペンスで販売される。^{（図版42）}

ダブリンの人々は快くこれに応じた。日に日に高まったヘンデル歓迎の熱狂ぶりについては、十二月二十九日にジェネズに宛てた手紙の中で、ヘンデル自身が次のように書いている。

あなたが私に示してくださった寛大なお心遣いに励まされ、当地で収めた成功についてお知らせします。貴族の方々からは六晩にかけての予約を頂き、六百人収容のホールは満席になりました。このため、私は入口でチケットを一枚たりとも売る必要がありませんでした。けっして自惚れではなく、演奏は大方の称讃を得ています。ロンドンから私が連れてきたアヴォーリオ女史は非常に好評で、私が育てたテノール歌手も大変満足して受け容れられています。バス・パートやカウンター・テノール・パートも大変良く、合唱団の他の歌い手達も（私の指揮の下）立派に歌っています。器楽奏者とはえば、これまた、実に見事です。デューボーク氏がそのリーダーを務めています。その奏でる音楽はこの魅力的なホールに心地良く響き渡り、私もそれに励まされ（また、体調がとて良いので、一心にオルガンを弾き、常以上の成功を収めています。《陽気の人、ふさぎの人、温和の人》で開幕しました。《温和の人》の歌詩は大いに称讃されていますので、ご安心ください。聴衆は（著名なご婦人方の中でもとくに選り抜きの人々や非常に高位の人々の他に）数多くの主教、司祭、カレッジの学長、それに大法官や監査役といった法曹会のお偉方などで構成されています。皆一様にこの詩を大変気に入っています。そのため、この曲を新たにもう一度上演するようにせがまれています。当地での親切なもてなしについては、十分にお伝えすることはできませんが、この寛大な国民の礼儀正しさについては貴下もご存知のことと思います。それゆえ、名誉と利益と喜びに満ちて過ごしながら味わっている満足については、貴下のご判断に委ねることに致します。私はすでに、六夜の予約公演が終わった後の追加公演の申し出を受けています。総督閣下（毎晩欠かさず、ご家族ともども聴きにきてくださいました）は陛下から私の滞在延長許可を仰ぐのは容易なこととお考えです

ので、予定より長く当地に滞在することは避けられないことと思います……貴下のご健康と幸福についてお便りを頂けるのを心待ちにしております。本当に気にかけております。そちらでのオペラについては、手紙を書いて頂くまでもありません。と言いますのは、そちらから当地の高貴な人々に宛てられた多くの手紙から、その不成功の知らせはこの町にもあふれかえっているのです。そのことは、この町の人々の大きな気晴らしと笑いの種になっていると言わざるを得ません。最初のオペラはロンドンを発つ前に私も聴きました。それは旅の道すがら私を大変楽しませてくれました。二番目の《ベネローベ、Patelape》^{註34}と呼ばれるオペラについては、ある高貴な人物が大変おどけて、こう書いています。「私はハーレクインとともにこう言わざるを得ない。われらがベネローベはあばずれ女でしかない」と。

あまり長く書きすぎたようです。

一七四二年一月十三日にも同じプログラムによる演奏会が開かれた。その三日後、『ザ・ダブリン・ジャーナル』は二十日のプログラムを発表した。

……（一月二十日には）《エーシスとガラティア》が上演される。ドライデン氏が作詞し、ヘンデル氏が新たに作曲した《聖セシリアの日のためのオード》、それにオルガンその他の楽器のためのコンチェルトも併せて演奏される……開演は七時。注意——馬車や椅子かごでご来場の殿方やご婦人はフィッシュンブル街を通るようにお願いしたい。そうすれば先夜起こったような不都合は避けられよう。従僕用には前回の場所に加えて、便利の良い部屋が借りてあるので、ご婦人方には、従僕

は呼ばれるまでそこで控えているよう、申し付けて頂きたい。

スウィフトは、彼の支配下にある教区牧師達から成る聖歌隊が、ヘンデルの演奏会で歌うことを許可しておきながら、突然それを取り消した。そのために、次の作品上演の準備は暗礁に乗り上げた。一月二十八日、スウィフトはセント・パトリック大聖堂の副司祭と参事会に宛てて、こう書いている。

……という訳で、私はまさに尊敬すべき副司祭各位にいかなる教区牧師聖歌隊も、聖歌隊主唱者も、オルガニストも、私や副司祭の同意なく、先に得た参事会の同意のみによって公開の演奏会に出演、もしくは協力することを許可しないよう、強く願うものである。

ある教区牧師達がフィッシュンブル街のヴァイオリン弾き達のクラブで演奏に協力することを、私が許可したと報じられているが、私はそのような許可証に署名したり、印を押した覚えは全くないことを、断固ここに宣言する。もし、そのような偽りの許可証が作られているとしたなら、前述の証可も取り消し、無効にする。副司祭および参事会には、教区牧師の中になかなる演奏会においても歌手、ヴァイオリン弾き、笛吹き、トランペット吹き、ドラムたたき、鼓手長として参加するようなことがあれば、それぞれの不従順、反抗、裏切り、忘恩という破廉恥な悪行に応じた処罰を下すよう、切にお願いするものである。

このころ、精神の安定を崩していた「ガリヴァー」作家^{註35}にまつわるこの意外な出来事は解決を見たらしい。歌手達は一月三十日の「いくつかの音楽を付加した《エステル》と呼ばれるオラトリオ」に

も、演奏会の第二シリーズの幕開けとなった二月十三日の《アレクサンダーの饗宴》にも参加するこ
とができた。

二月二十七日の『ザ・ダブリン・ジャーナル』に掲載された一抹の悲哀を帯びた演奏会予告は、ヘンデルが町中の最高の演奏家を一人残らずかき集めてしまったことを物語っている。「困窮した外国紳士、ライナー氏のために三月四日の木曜日、スモック・アレーの劇場で……《忠実な二人》^{註36}The Constant Couple》が上演される……注意。ライナー氏は次の火曜日に予定していたが、優れた音楽家がすべてヘンデル氏の演奏会に雇われているために、上演の延期を余儀なくされた……」。

三月二十四日に「《ハイメン神 Hymen》と呼ばれる新しいセレナータ」が上演された。これはオペラ《イメネーオ》を演奏会形式に改訂したものである。この上演には歌手にして女優、そしてかの有名なトーマス・アーン^{註37}の妹、スザンナ・シバ^{註38}が加わっていた。彼女は最後にはガリックの相手役を務めるほどの傑出した悲劇女優となった。「彼女の声は糸のように細い」とバーニー^{註39}は意地悪く評しているが、歌手としての彼女の表現力は他の追隨を許さなかった。三月十一日の『ザ・ジェントルマンズ・マガジン』の匿名の詩は、彼女のダブリンでの演奏をことのほか讚美している。^(図版40)

シバ夫人へ、ダブリンでの演奏を聴いて。

……………

アポロのリラほどに楽の音美わしく

合唱隊の中央に彼女は立っている。

敵かな調べが静かに流れ、

リディア旋法にのったアリアが愛を招くと

彼女の表情は震える弦へと伝わり、

彼女の歌うすべての感情を奮い起こさせる。

奔放な美の女神達が宙を舞い、

彼女の唇にとまって 腰をおろし、歌を紡ぎ出す。

.....

ああ、素晴らしい乙女よ、汝はそのか弱き肉体に

なんと人類の天才を宿していることか！

.....

ヘンデルが彼女に魅せられていたという事実は、バーニーも陰ながら認めざるを得なかった。「ヘンデルはシバ夫人を大変気に入っていた。その声と物腰のおかげで、ヘンデルは彼女の音楽上の知識の欠如を非難する気になれなかった」。

三月二十七日の『ザ・ダブリン・ジャーナル』に予告された『メサイア』の初演には、他の歌手とともに、彼女も加わった。

いくつかの刑務所の囚人救済と、ステイーヴン街にあるマーサー病院及びインズ・クエイの慈善診療所支援を目的として、四月十二日の月曜日にフィッシュヤンブル街のミュージック・ホールで『メサイア』と呼ばれるヘンデル氏の新しいグラランド・オラトリオ^{註40}が演奏される。二つの大聖堂

の聖歌隊からの男性歌手が協演し、ヘンデル氏のオルガン・コンチェルトも併せて演奏される。

演奏は「何人かの著名人の要望により」四月十三日に延期された。十日の『ザ・ダブリン・ジャーナル』には次のような指示が掲載された。

「この高潔にして壮大な慈善演奏会——そのためにオラトリオは作曲された——を支援する多くの紳士淑女の方々は、この演奏会に出席するという榮譽を得たご婦人方にはフープをつけずにご来場くださるようにと望んでいる。より多くの人が入場できれば、慈善の意味もそれだけ大きくなるからである」。

その公開リハーサルについて『ザ・ダブリン・ジャーナル』は、『メサイア』が「これまで聴かれた音楽の中でも最高の作品であることは、最も優れた批評家達の認めるところである」と報じている（二七四二年四月十日）。四月十三日の初演も同様に好評を博した。

今週の火曜日（十三日）にヘンデル氏の宗教的グラランド・オラトリオ『メサイア』がフィッシュヤンブル街のニュー・ミュージック・ホールで演奏された。最高の批評家達もそれが最も完成された音楽であることを認めている。『メサイア』が憧れを抱いて群れ集った聴衆に与えたこの上ない喜びは、言葉では言い尽くせない。高貴で威厳に満ちた感動的な歌詞に付けられた音楽の崇高さと品位と優しさは、ともに相たずさえて恍惚とした心と耳をとらえ、魅了した。これだけのご承知おき願いたい。ヘンデル氏は気前良くこの大演奏会で得た収益金を囚人救済協会、慈善診療所、マーサー病院に等しく分けるべく拠出し、人々は感謝をこめて永久に彼の名を記憶に留めるだろうことを。

また、二つの聖歌隊からの男性歌手達やデュボーグ氏、アヴォーリオ夫人、シバ夫人もそれぞれの役を見事に歌った。彼らもまた、同様に私欲にとらわれずに行動し、大衆から相応の称讃を受けた。このような有益で大規模な慈善事業を推進できた喜びで彼らは満足した。会場にはおよそ七百人の聴衆が集まり、この高貴で敬虔な慈善のために集められた金額はおよそ四百ポンドに達した。その中から百二十七ポンドずつが高潔で敬虔な三つの慈善事業に捧げられる」(『ザ・ダブリン・ジャーナル』、四月十七日)。

演奏中に即興的な讃辞がとび出した。首席司祭スウィフトの友人、ドクター・ディレイニー師(後にヘンデルの友人であるベンダーウズ夫人と結婚は「彼は侮られ」を歌うシバ夫人にすっかり心を奪われ、席を立て、神に仕える身にはいくぶん僭越気味に、こう叫んだ。「ご婦人、あなたのすべての罪がこの歌で許されますように!」

ヘンデルがダブリンに滞在していたある晩のことである。ある歌の独奏を受け持っていたデュボーグは、即興で終止カデンツァを演奏していた。長いこと他の調性をさまよい、明らかにいくぶんうろたえ、原調を見失ったかの様子であった……しかし、どうにかこの長いカデンツァをしめくくるトリルにたどり着くと、ヘンデルは劇場の隅々まで聞こえるような大声で「おかえりなさい、デュボーグさん!」と叫んで、聴衆を大喜びさせ、一層の拍手を巻き起こした。

(チャールズ・バーニー、一七八五年)

ヘンデルは『メサイア』のいくつかの部分をこの初演以前に改訂している。それは多分、先の四月九日に実施された公開リハーサルの結果と思われる。実は、このオラトリオは一七四一年に作曲されたとおりに演奏されたためしがない。『How beautiful are the feet』には新たに二重唱用の楽譜を書いているし、地方の男性ソリストを考慮したためか、混雑した演奏会場(公認の定員を百人超過していた)に合わせてドラマの進展を速めるためか、へなにゆえにもろもろの国人はさわざたて『Why do the nations』を本来の半分以下の長さに縮小している(この縮小の処置は二度と撤回されることはなかった。また、へされど彼のきたり給う日に誰か耐えることをえんや? But who may abide)と『汝鉄の杖もて彼らを打ち破り Thou shalt break them』をレチタティーヴォに改作している。合唱には二つの大聖堂から二十六人の少年達が起用された。男性の独唱者も両大聖堂から起用された。その中には二人のカウンター・テノールもいた。そのうちの一人はへおお、良き知らせをシオンに伝えるものよ O Thou that tellest』を、もう一人は二重唱へおお死よ、汝の棘はいずこにありや O Death, where is thy sting』の拡充版を歌った。

ローレンス・ホワイトが四月二十日付の『ザ・ダブリン・ジャーナル』に寄せた詩は、このイヴェントに関して現存する唯一の不名誉となっている。

これ以上ヘンデルを称讃する術があらうか?

《メサイア》が月桂樹の森を彼のものとしたのだから。

この森がけっして枯れることもなく、朽ちることもないように、彼の才能もまた、枯れることもなく、朽ちることもない。

(中略)

しかし、われらのメサイアこそは、その御名の讃美されんことを！

天も地も主の奇跡を顕している

主の降誕、主の受難、そして主の復活は

主の昇天と力強く結びついている……

翌月《サウル》が上演された。これはリハーサルを聴いていた「批評家達が全員口をそろえて、この国で聴いた演奏の中でも最高のもの」と評したほどであった(『ザ・ダブリン・ジャーナル』)。続いて六月三日に《メサイア》が再演されたが、その二日前には公開リハーサルが行われている。それは夏の盛りで、ヘンデルのシーズンの最後でもあった。『ザ・ダブリン・ジャーナル』は「会場をできる限り涼しく保つために、それぞれの窓の一番上のガラス一枚が取り外される。——注意。これはヘンデル氏の我が国滞在中の最終公演となる」と報じている。

ヘンデルは一夜はシバ夫人とその義妹セシリア・アーンによるオール・ヘンデル・プログラムのソロとデュエットを聴き、また一夜はスモック・アレー小劇場でガリックの演じる『ハムレット Hamlet』を見たものと思われる。その後、ヘンデルはイギリスに帰る準備にとりかかった。ヘンデルはジョン・スウィフトに別れの挨拶に出かけた。そのとき語られた一言は、今ではすっかり狂気に冒されていたこの主任司祭の最後の分別ある言葉となった。

今やアイルランドを去ろうとしていたヘンデル氏は、スウィフトに別れの挨拶に出かけた。この主任司祭にそれがヘンデルであると分らせるのに、召使いはかなりの時間を要した。彼が誰であるかが分かるとスウィフトは叫んだ。「おお！ ドイツ人にして天才！ 非凡なる方！ その方をここにお通しなさい」。召使いは言いつけどおりにした。ヘンデルはそこときの流れの中に生きた最高の賢者の破滅した姿を見ることになった。すべてはここで無へと帰したのである(ラエティヤ・ジャ・ビルキントン夫人、『回想録 Memoirs』、一七五四年)。

八月十七日の『ザ・ダブリン・ジャーナル』には簡潔に「先週、高名なるヘンデル氏はイギリスへと出航した。彼はその類い稀な作品と素晴らしい演奏とでつとに有名であり、最も心地良い音楽でこの町を楽しませてくれた」と記されている。

* * *

オラトリオへの決意

十ヵ月ほどしてロンドンに戻ってから——ロンドンに居を構えて以来、これほど長く留守にしたことはなかった——ヘンデルは人々が自分に対して以前より好意的になっていると思ひ込んだようである。少なくとも、彼に好意的な力強い声援がひとつあったことは事実である。音楽のことは分からな

いと自認していたアレクザンダー・ポープは、ヘンデルの真価についてアーバスノット博士の意見を

求めた。返事はこうであった——「彼の能力についてあなたの考え得る最高のものを考えなさい。そして、彼の能力はあなたの考え得る範囲をはるかに超越しているのです」。

この言葉を受けて、ポーブはその著『愚人列伝 The Dunciad』の第四巻で、ヘンデルを取り上げている。この本はヘンデルがダブリン滞在中に出版されている（24頁参照）。ポーブはその詩の脚注で「イタリア・オペラの性格と特質、すなわち、その気取ったアリア、柔弱な音、お気に入りのアリアを支離滅裂に寄せ集めてでっち上げたオペラ」のことを攻撃している。そして「百本の手をそなえて」というこじつけの比喩に「ヘンデル氏はオーケストラに数多くの手と多種多様な楽器を導入した。合唱をより豊かにするためにドラムや大砲まで用いた。それは当時の上品な紳士達にはあまりに雄々しすぎるのが分かり、彼は自分の音楽をアイルランドへと移動させねばならなかった」と解説を加えている。

ヘンデルが常々主宰していたある演奏会で初めてセルバン^{註41}が用いられたとき、彼はその大きく粗野な音にうんざりして、激怒して叫んだ。「あのやっかいな音は一体何かね？」それがセルバンという名の楽器だと知らされると、彼はこう答えた。「おお！ 蛇だって！——なるほど——だが、イヴを誘惑したのはこの蛇ではないと思うね」。

（トーマス・バズビー、一八二五年）

「人々の多くはヘンデルに好意的であった」とするマナリングの主張は、後になってから考えられたものである。これはオラトリオのその後の栄光と、オラトリオの創始者として彼が次第に神格化されていた経過を知る者の意見であった。ヘンデル自身はダブリンでの歓迎ぶりに励まされ、かの地を再び訪れる決心をしており、イギリスでの演奏活動について、具体的にはなにひとつ決めかねていた。このころ、サー・ロバート・ウォルポールは戦を求める世論に反対したかどで、首相としての公職から身を退かされていた。そのことはヘンデルも知っていた。しかし、ヴォクソールとは別のプレジヤール・ガーデンもラネラに開設されていた。ここでは毎週リドットが開かれ、「大勢の貴族、それに大勢の下層民も集まった」。ミドルセックス卿のオペラは案の定赤字だった。「昨夜のピットとボックスには四十三人しか客がいなかった」とホレイス・ウォルポールは五月二十六日に報告している。

ヘンデルは千ギニーで二曲のオペラ作曲して欲しいという申し出を受けたが、帰国後、ロンドンからジェネンズに宛てた最初の手紙（九月九日付）で、劇場に戻る意志のないことを伝えている（ダブリンからの帰路、ヘンデルはジェネンズを訪問し損なっている）。

貴下の《メサイア》がかの国でどれほど素晴らしい歓迎を受けたかについては、手紙よりも、私の口から直に申し上げれば、一層良い報告ができることと確信しておりましたので、アイルランドからロンドンへの帰途、本当に貴下にお目にかかるつもりでおりました。エルフィン司教というさる高貴な人物（音楽に大変造詣が深い方）がこのオラトリオのでき具合について意見をくださいましたので、ここにその内容を彼自身の言葉で付け加えておきます。

《メサイア》の台本の印刷本を貴下のためにステッド^{註42}氏宛てにお送りしておきます。あの寛大で礼

儀正しい国で私が収めた成功のあらましは、ロンドンで貴下にお会いする榮譽を得たときにお話しします。この冬のオペラの監督が、私に任せられているという噂は根も葉もないことです。オペラ活動を進進しようとしている人達も意見が一致せず、全く混乱に陥っています。(何人かの友人達が望んでいるように) 私がこれからオラトリオの方向でなにかやってゆくかどうかは、まだ決めかねています。しかし、次はアイルランドで十二月にわたるオラトリオ・シーズンを持つことは確かです。すでに、あちらではこのための予約を大々的に募っているところです。

十月二十九日、ジェネズはこのことをホールズワースに伝えている。明らかにこれは《メサイア》を聴く機会が与えられるものと期待してのものである。「あなたはヘンデルについて誤った情報を与えられたようですが、彼は次の冬までアイルランドには帰りません。ですからこのシーズンには彼の大変素晴らしい音楽会が聴けるものと期待しています。《メサイア》は異口同音に彼の傑作と言われています……」。

エルフィン司教(エドワード・シング博士)の意見(最近までは散失したものと考えられていた)はこのような主旨の発言の一例である。最近、それが発見されたために、ダブリンの聴衆がヘンデルの作品に對して肌で感じた熱狂ぶりを窺い知ることができる。

ヘンデル氏はオラトリオにおいて私の知るいかなる作曲家をも凌駕している。《メサイア》という有名なオラトリオで彼はまるで彼自身を凌駕したかの如くである。とにかく作品全体が、私がその台本を読み、音楽を聴くまでに思い描いていたものを超越しているのである。この作品は他の作

品とは異なる種類の音楽であり、これこそがこの作品の顕著な特徴となっている。筆の運びは非常に手馴れており、また、手の込んだものであるが、ハーモニーは素晴しく、のびやかである。博学であるが、浅学であるが、耳を持ち、音楽を聴こうという意志のある者は誰でも楽しめる作品である……この作品がとくに優れたものであるとする理由の第三は、對話がないことである。ドラマというものは普通、非常に對話が多く、ときに、それらが大変短いやりとりで崩されることもある。その上、もしそれが単調で無味乾燥な對話であれば、失笑を買い、軽蔑されることになる……。

シングの書いたこの称讃の文章には、ヘンデルによる簡単な注釈が付いている。これは多分、ジェネズに宛てたものであらう。

「貴下にお送りしますのは、ただ、アイルランドの人々がどれほどオラトリオを熱望しているかをお示しするためです。印刷物にせよ、手書きにせよ、このような例をもっと沢山お送りしようと思えば、できるのですが」。

司教は《メサイア》の続編として《告解者 The Penitent》というオラトリオ(オラトリオの題材としてはきこえない例のひとつ)を作曲するよう提案したが、ヘンデルがそれを無視したのは賢明だった。ヘンデルはダブリンでは話題にものぼらなかつた《サムソン》に仕上げのひと筆を加えた以外、年内に演奏会をもつための準備は特別なにもしていない。

翌一七四三年が明けるころまでに、ヘンデルも迷いを払拭した。ダブリンで大成功を収めた方法に倣って、予約による六回の演奏会から成るオラトリオ・シーズンが告示された。会場はコヴェント・ガーデンであった。慣例に従って舞台劇の政府検閲官ウィリアム・チュートウィンドに《サムソン》の

上演許可を求めて申請が出された。閲読用には手書きの台本が提出された（現在、カリフォルニアのハントントン図書館蔵）。二月十八日の《サムソン》初演時に演奏するためのイ長調のオルガン・コンチェルト（後に作品七、第二番として出版）は二月五日に完成した。このオラトリオはたちまち成功を取めた。皮肉屋ホレイス・ウォルポールでさえ心を動かされ、二月二十四日にホレイス・マンにこう書き送っている。

「ヘンデルはオペラに対抗してオラトリオを始め、成功している。彼は笑劇に出演中のすべての目ぼしい女性と《ロースト・ビーフ》^{註41} Roast Beef》に出演中の歌手達を、両劇場の幕合いから借り入れた。そのうちの一人の男は一音しか出せないし、一人の少女は一音すら出せないでいる。彼らはそんな具合に歌い、勇敢にもハレルヤを歌っている。そして、たまたま旋律らしきものが聞こえてくると、人の良い聴衆はレチタティーヴォにまでアンコールを求めるありさまである」。

オラトリオが隆盛を極めている——私には、まるでそれは天国を思わせる。なぜなら、天国では声を持つていようといまいと、皆、歌が歌えるのだから。

（ホレイス・ウォルポール、一七四三年）

イギリス人の歌手についてのウォルポールの非難は不当である。自国の歌手が自国語で歌うことを信頼する——これはヘンデルの新たな決意のひとつであった。ただ、アヴォーリオ女史だけは例外で、

ヘンデルは翌年まで、イタリア・オペラのスター歌手なしで済ますために彼女を使った。主役にテノール（信頼できるビード）を配したことは、イギリスのオラトリオの進化における転機となった。もう一人のテノール、トーマス・ローは一七四三年にヘンデルの企業に登場した。彼は（バーニーの言葉を借りれば）「我が生涯最良のテノールだが、努力と修業不足のため、彼が自分の耳で聞き覚えたバラッドぐらいいしか安心して任せられない」。

《サムソン》は予約の六夜をすべて満席にした——それは、レディー・ハートフオードが息子に書き送っているように、「リドットがいつになく最悪だった」ことに助けられたのである。彼女はさらにこう続けている。「リドットはどんな階層の人であれ、お客はほとんどいませんでしたし、著名人も二十人とはいませんでした。一方、オラトリオははるかに受けが良く、町中の高貴な人々が皆、こちらに集まっていました。人々の言うには、ヘンデルはオラトリオを自分の作曲した作品の中でも最高のものにしようと努め、そして、そのとおり実現したとのこと」。

ヘンデルは成功を求めて「さらに六回の演奏会」を企画した。その皮切りに《陽気の人、ふさぎの人》を上演した（このときは《温和の人》が省略されたので、ジェネズは快く思わなかった）。この後さらに、ヘンデルは二夜の演奏会を企画した。それは三月十九日の『ザ・デیلی・アドヴァタイザー The Daily Advertiser』に「新しい宗教的オラトリオ。オルガン・コンチェルトを併演。デューボーク氏によるヴァイオリン独奏曲一曲」と告知された。ヘンデルが《メサイア》という正式名称の使用を躊躇したことは、同じ三月十九日の『ザ・ユニヴァーサル・スペクテイター』^{註45} The Universal Spectator』に現れた遠慮のない手紙から容易に納得できる（もちろん、この手紙は上演に先立って書かれたものである）。

拝啓

……私の……意向は……現在上演されているようなオラトリオの適否を考えること、また、もし可能であれば、ほかの人々も考えるように仕向けることにある。オラトリオに反論する前に（私が偏見や党派心から反論するなど誤解されないために）、私自身音楽愛好家であり、ヘンデルの演奏にはことごとく格別の思いを寄せ、彼をけっして見捨てたことのない数少ない人間の一人であると宣言しても、不作法にはならないと思う。私はまた、教会音楽を大いに崇拜し、いかなる作品も教会音楽に匹敵するものはなく、それを作曲する能力においてヘンデル氏の右に出る者はいないと思っている。本論に戻ろう。「オラトリオ」は「宗教的行為」か否か。もしそうであるなら、劇場はそれを演奏するにふさわしい教会たり得るか、あるいは一団の演奏者達は神の御言葉を伝えるにふさわしい聖職者たり得るか、と私は尋ねたい。なぜなら、「オラトリオ」が宗教的行為だとすれば、こういうことになるのだ……

もしそうでないとすれば、すなわち、もしそれが宗教的行為としてではなく、娯楽や楽しみのためだけに演奏されるのであれば（実のところ、私は信仰心からオラトリオを聴きに出かける人はほとんど、あるいは全くないと確信しているのだが）、神の御名と御言葉をかくも軽々しく用いているとは、なんと「冒瀆」であろうか？ 気晴らしをしながら、同時にモーセの「第三の掟」を破る従犯者となっていないか、各人考えてもらいたい。それは「畏れをもって神に仕えよ、敬虔な思いで神に向かつて喜びの声を上げよ」という詩編の作者（ダビデ）の忠告に背くものと確信する。偉大なるエホバ、最も神聖にして神にのみふさわしい偉大なるエホバという御名（ユダヤ人は祭司以外、この名を

口にしようと思えない）が、軽々しいアリアとまでは言わないが（ヘンデル氏が作曲したのだから、そんなことはない）とあえて言っておこう、厳粛な礼拝を行うにはあまりにふさわしからぬ人々によって歌われるのを聞けば、敬虔なユダヤ人はどんなにか感情を害するにちがいない。（中略）「異国で神の歌が歌えようか」とダビデは言った。だが、もし彼がそれが劇場で歌われるのを聞いたとしたなら、それ以上の違和感を持ったにちがいない。

しかし、旧約聖書が汚されたり、神がエホバの御名によって汚されただけでなく、そこには新約聖書も加えられ、神が最も神聖にして慈悲深いメサイアという御名によっても汚されているのだ。というのは、伝え聞くところによれば、そういう名のオラトリオがすでにアイルランドで上演され、間もなくここでも演奏されるとのことである。その作品がどんなものかは知らないで、何も言えないが、これだけは再度、尋ねておきたい。上演の場所と演奏者はそれにふさわしいか？ と。

フィラリシーズ^{註46}（真理を愛する者）

これは四年前の《エジプトのイスラエル人》が受けた以上に強い抵抗であった。これは、ある程度、ウエズリー兄弟^{註47}やウィリアム・ローの唱える宗教感情の新しいうねりに端を発するものと捉えられる。ちょうどこの年、二つの新しい教会がロンドンに新設された。これらの教会は讃美歌をオルガンの伴奏なしで「速やかに歌う」ことで有名だった。この運動の本来のピューリタニズムは、とくに劇場を腐敗の源として非難していた。しかし、イギリスのオラトリオの伝統は、中産階級の情熱に基づいて築き上げられていった。この情熱を生み出したまさにその運動が、初めはほかならぬこの作品に反対していたことは奇妙である。ジョン・ウエズリー自身は《メサイア》の熱狂的な支持者であった。

数年後のブリストルでの上演後、彼はこう書いている。「説教を聞きに集まった会衆が、この曲の演奏を聴く聴衆ほどに真剣かどうかは疑わしいところである。数多くの曲、ことに何曲かの合唱は私の予想をはるかに凌ぐものだった」(『ジャーナル Journal', 一七五八年八月)。

この作品に対する非難は何年も続いた。ヘンドルの信頼できる友人のひとり、ミス・キャサリン・タルボットでさえ、一七五六年のコヴェント・ガーデンでの《メサイア》上演後、「劇場はこのような敵愾な作品の上演にはふさわしい場所ではありません」と告白せざるを得なかった。

『ザ・ユニヴァーサル・スペクテイター』の編集者は先の手紙に対して、声明文を付してヘンドルを防御している。「次の手紙は多くの諸君諸兄、なかなしく快活で上品な趣味をお持ちの方々にとって、幅広く支持を得ている演奏について、あまりに厳しい非難であると思われる。しかしながら、私にはそれを差し止めることができなかった。なぜなら、この手紙はよく構想が練られており、敬虔な思いで全体を貫き、ヘンドル氏の真価を傷つけるようなことはなにひとつ書いていないからである。それがどのような好結果をもたらすかについては、ただこうしか言いようがない。すなわち——それが値するだけの価値あらしめよと——」。

ヘンドルは一般の人々の捉え方がこの編集者によって代弁されたものと確信し、「敬虔さ」の表明された手紙をさして気にもとめず、やりすごすことができた。

もっと率直な反応がいくつかの詩となって現れた。それは『ザ・ユニヴァーサル・スペクテイター』を読んだある紳士が即興的に詠んだもので、三月三十一日の『ザ・デイリー・アドヴァタイザー』に掲載された。

止めよ、熱狂者よ、天の歌を非難するのを、

なぜなら、熾天使はメサイアを称えて歌うのにふさわしいのだから！

「劇場は神を讃美するのにふさわしからぬ」などという

つまらぬ論争を止めよ。

聖められた歌は音楽に新たな恵みを与え

徳を畏れて、劇場を聖なところとなす。

このように、ハーモニーは天の力を得、

魂を地より救い、地獄を天国へと化す。

ジェネンズの《メサイア》批判

この匿名の詩の作者はジェネンズであったという可能性もある。もしそうだったとしても、彼の個人的見解は前掲の詩と若干異なっていた。《メサイア》がダブリンで初演されたことに狼狽したジェネンズは、積極的にヘンドル批判を行った。当時、二人の間になにか直接的なやりとりがあったかもしれないが、現存する証拠はなにひとつない。しかし、彼の意地の悪い非難ぶりは、ホールズワースと交わした書簡から判断することができるといえる。ホールズワースは海外からジェネンズに音楽や諸々の出来事について情報を提供していた。この年の初め、剽窃に対する非難と《メサイア》に対する失望を表した手紙が届いた。《メサイア》はジェネンズの期待にそわなかったのである。

……以前、私のボックス^{註22)}「ホールズワースから贈られた一箱の楽譜集」の中の一人の作曲家——ス

カルラッティのことですが——はなかなか良いと申し上げました。その他の作曲家については、公正に判断せずに咎めることはしません。ヘンデルはそれらの作品の中からかなりの借用を行っており、あえて言うなら、これから先も、彼がそれから盗作しているところを発見することになりましょう。私は以前にもスカルラッティとヴィンチからの借用を発見していますから。彼はミルトンの『闘士サムソン』を翻案した素晴らしいオラトリオを作曲しましたが、今度の四旬節にはそれでシーズンを始めのつもりです。彼の『メサイア』にはがっかりしました。彼はその作曲に一年かけ、彼の作品中、最高のものにするとっておきながら、大急ぎで作曲してしまったのです。こんな具合に裏切られるのなら、今後彼には宗教的な台本は渡さないことにしようと思います……。

ホールズワースはジェネズその他の手紙からも『メサイア』に関する悪口を聞かされていたらしく、二月十六日にはその返事として、次のように書いています。

……あなたの友、ヘンデルがユダヤ人のような男と聞いて残念です。とくに悪く言う訳ではありませんが、彼の怠慢はあなたご自身のみならず、他の皆にとっても大きな失望です。と言いますのは、彼の作曲に対しては期待が大きかったと聞いていますから。台なしにされたとは言え、歌詞は今でも読めるものと思いますので、帰りましたらそれを楽しみにしています。私は音楽が分かりませんから、世間の人々より気楽だと思っています……。

ジェネズはこの話題に同調して、即座に返事を書いている(二月二十一日)。しかし、彼は『サム

ソン』を称讃するだけの寛大さも示している。

……ヘンデルに私の持っているイタリア音楽のことを話してしまったことを後悔しています。彼にはそれらから借用して欲しくないのです。彼は自分自身のもっと素晴らしい才能の宝庫を持っています。『メサイア』は、公演に適したものにするために不十分な箇所を手直することはまだ可能な状態にあります。この件に関してはぜひぶん彼に言いました。彼は非常に怠慢かつ頑固で、私の忠告を受け容れるかどうかはなはだ疑問です。私はアイルランドで印刷されたコピーを持っていますが、おかしいところが一杯あります。もし彼が当地で訂正版を印刷しないのなら、私は自分でそれをするつもりです。そして、彼には序文の中で私の心の一端を知らせようと思います。お気づきのとおり、私はいささか気分を損ねています。気持ちを楽しめるためにこのイライラを発散したいのです。さらに癩の種は、もし彼がこのオラトリオを完全なものにしたところで、町には例の兄弟「ウェズリー兄弟、つまり、メソジスト達」から起こったと言われるこの作品の上演反対運動があることです。これは序文をいくぶん長くする原因となるかも知れません。

……先週の金曜日、ヘンデルは『サムソン』を上演しました。これは最高に素晴らしい音楽会で、私もこの上なく楽しんで聴きました。それだけに、彼が『メサイア』をおさなりにしていることには怒りを覚えます。あなたは彼をユダヤ人と呼びましたが、それは彼を買いかぶりすぎというものです。ユダヤ人なら預言者に対してもっと敬意を払ったことと思います。彼には異邦人という名の方がびつたりします。しかし、分別ある異邦人であれば、ハミルトンという男がミルトンの『闘士サムソン』に余分な筆を加えた駄作の方を、イザヤやダビデ、十二使徒やエヴァンゲリスト、そして

イエス・キリストの崇高な御心や御言葉よりも好むということはなかったと思うのです。

三月の末、《メサイア》の上演を聴いたジェネンズは攻撃の手を広げた。それはヘンデルの筆耕者スミスにまで及んだ。この控え目な人物に対するものとしては珍しい記述である。

……昨夜、《メサイア》が上演されました。抗議する声があるにもかかわらず、この曲は明日も上演されることでしょう。反対運動の影響が表れているのはただ作品のタイトルを広告に出さないということぐらいのものです。しかし、これは《メサイア》の上演に関する諸々のことが例の兄弟や気難しがり屋にとって気に入らないのと同様に、私の癪にさわる愚かしい行為なのです。つまるところ、この作品はいくつか至らぬ部分があるものの、全体としては立派な作品です。いくつかの欠点に関して、私は執拗に手直しするように迫ったのですが、彼はあまりに怠慢で頑固で、私の説得に応じません。彼とその追従者スミスは、印刷された詩を台なしにするあらゆることをやっています。多少の困難は伴いますが、私はそれを元どおりに復元できると思っています。

五月初めにヘンデルは再び健康を損ねた。五月四日、ウォルポールは「ヘンデルは中風に見舞われ、作曲することができない」と書いている。ジェネンズでさえ厳しい非難を撤回し、「……聞くところによると、ヘンデルは麻痺性の病気が再発し、思考と言語に障害が出ているとのことである。彼は一年間外国で過ごすと言っており、来年は全く音楽が期待できない。町は唯一の魅力を失ってしまった訳で、私もせいぜい田舎にひきこもろうかと考えている」と言っている。

幸いにも、それは一過性の病であった。ヘンデルは六月までに次期シーズンのための計画を練り始めている。まだ大衆の反応に確信はもてなかったが、コングリーヴの台本にアーンが作曲したマスク《パリスの審判 The Judgement of Paris》が前年に成功したことに目をつけ、いつも変わらぬ人気を得ている《エーシスとガラティア》の例に倣って、『セメレの物語 The Story of Seneca』で人気を得ようと決心した。これはコングリーヴの台本を基にしたもので、イタリア・オペラがロンドンに定着する以前に、その場しのぎの作品としてエックレスが作曲したことがある（しかし、上演はされなかった）。

一方、ヘンデルの《セメレ》はオペラでもオラトリオでもなく、世俗的で官能的な歌詞をオラトリオ風に作曲したものである。舞台上で、合唱を伴い、演技なしで上演されたのである。この上演方法はコングリーヴの台本に直接的な影響を与えた。ヘンデルは、おそらくニューバラ・ハミルトンの協力を得て、適宜台本を調整した。レチタティーヴォは削られ、いくつかのアリアの歌詞は取り替えられ、合唱のためのかなりの加筆があった。この台本は最終的にはコングリーヴの原作の特色をほとんど留めぬものとなった。

ヘンデルの筆の進みは、病氣のために遅くなるということは全くなく、《セメレ》は四週間で完成された。健康状態も回復したので、ヘンデルは本来であればこのシーズンの第二作の準備にとりかかるはずであった。しかし、そこへメイン河畔のデッティンゲンという村近くでのイギリス軍の大勝利が伝えられた。

ハノーヴァーとイギリスの連合軍によってフランス軍が大敗を喫したのである。ジョージ二世がその短い脚を頼りに自ら軍の指揮をとったという予期せぬ事実^{註48}の前には、二人の将軍と約二千人

の兵士の犠牲など些細なことであった。ジョージ二世は「私が敵前逃亡しないことはこの脚がよく知っている」と言っていた。国中が歓喜し、ヘンデルは「祝典の流儀」に倣って《テ・デウム》とアンセムへ主よ、王はあなたの力によって喜び^{註49}の作曲に精力を傾けた（この作品はイタリア人作曲家ウリオからの借用が多い）。

ジェネンズは、ヘンデルの健康が回復したことを知り、ヘンデルへの攻撃を再開した。

……ヘンデルは完全に回復し、主君のドイツからの帰国にそなえて新しい《テ・デウム》と《アンセム》を作曲したとのことです。私はまだ彼に《メサイア》の手直しをさせることを諦めてはいません。せめて、その怠慢の償いに苦しめてやろうと思っています。否、彼はもう苦しんだと聞いています。なぜなら、彼はガーンジー卿に、私が書いた手紙が彼の近ごろの病の原因であると語ったということです。また、彼は熱のせいではなさか精神を乱しており、《メサイア》よりもダゴン^{註50}（《サムソン》というオラトリオで彼が非常に好意的に扱った男）の方を好んだために、罰が当たったと言っているそうです。このことから見ても、私は彼を苦しめたことになりましたが、まだまだ十分とは言えません……。

しかし、ジェネンズの友、ホールズワースは、この新たな非難は度を越したものであると捉えている。十月二十八日、彼はフレンツェから田舎の邸に滞在中のジェネンズに手紙を書き、こう忠告している。

……レスターシャー（ジェネンズのこと）に思いのたけを申し上げることをお許しください。実のところ私はあなたに怒りを覚えます。あなたは田舎に長く居座りすぎなのです。そのためろくなことはなく、あなたの最良の友、ヴァージルやヘンデルと諍いまで起こすのです。あなたの話によると、哀れなヘンデルが熱を出したのはあなたが原因とのことですが、彼がかなり回復した今、あなたは彼に対する攻撃を再開しようというのですね。まだ十分とは言えない、とご自分で言っているのですから。これは誠に卑劣なことで、あなたらしくありません。どうか憐れみをかけてやってください。サムソンに石臼を回させたり、ペリシテ人のようなやり方で彼を扱うことはおやめください……。

この比喩は二、三カ月の間、ジェネンズの攻撃を静めたようである。この間、ロンドンではヘンデル作品の混合物が上演されていた。《ロクサーナ、またはインドのアレグザンダー Roxana, or Alexander in India》は『ザ・デイリー・アドヴァタイザー』に「ヘンデル作曲」と公示され、ヘイマーケットで幕を開けた。^{註52}

この作品は年内に十二回の上演を数えて、ミドルセックス卿を大いに喜ばせた。これはヘンデルの《アレックスサンドロ》の異稿である。ヘンデルはヘイマーケット国王劇場のために新作オペラを作曲することを断っており、その償いとして、この作品の上演を自ら申し出たのかもしれない。^{註23} 編曲を担当したのはヘイマーケットの新しい劇場付き作曲家ランブニャーニであったと思われる（二七四六年に上演されたランブニャーニの《インドのアレックスサンドロ Alessandro nell'Indie》は全く別の作品である）。原曲はともかくとして、この編曲ものは真のヘンデル愛好家の気に入るところではなかった。十一月十八日、ディレイニー夫人はこう書いている。「《アレグザンダー》というオペラを聴きました。改作されて悪

くはなっていました。他のイタリア・オペラよりはるかにましでした。でも、好きなアリアがずたずたにされているのを聴くのはイライラものでした」。

一方、《デッティンゲン・テ・デウム Dettingen Te Deum》について彼女は「大変素晴らしい作品で、すっかり心を奪われてしまいました。あなたも想像がつくと思いますが、あなたの友、D・D「ディレイニー博士」も同様です。皆、異口同音にこれこそヘンデルの最高傑作だと申しております。私はそこまで言えるほどこの作品について知っている訳ではありません。でも、この世のものとも思えぬ美しい作品であることは確かです」と言っている。

新作に対するディレイニー夫人の評価——《セメレ》

祝典用のアンセムが片づく、ヘンデルは新しいシーズンの第二作目の作曲にとりかかる余裕ができた。それはジェイムズ・ミラー師の台本によるオラトリオ《ヨセフとその兄弟 Joseph and his Brethren》である。ウィントン・ディーン^{註24}の言葉を借りれば「オックスフォードのウォドハム・カレッジ出身の舞台にとりつかれた聖職者」ミラーは、用語や構成に重要な欠陥のある台本を提供した。「ああ、妬まじきかな、汝ベリカンドもよ」などという詩に、ヘンデルは一体どんな楽想を湧き立た

せ得ようか？ ストーリーは本来欠くことのできない要点が削除されていたり、劇的な対立がほとんど意識的に回避されているために、難解なものになっている。この台本の欠点を補おうと、ヘンデルは音楽付けで最善を尽くしているが、ミラーの台本のもつ構想上の不可解さは如何ともし難かった——しかし、誠に残念ながら、ミラーは献辞^{註25}の中で「筆者はこの主題を段階的、かつ巧妙に解明するとともに、登場する人物像を明晰、かつ十分に掘り下げた」と語っている。にもかかわらず、でき上

がった台本にはその成果は全く窺えない。十八世紀の聴衆はある意味で現代の聴衆より厚遇されていた。というのは、オラトリオの台本上の多くの難解な箇所については、台本の初めに印刷された「公告」と呼ばれる作者自身の解説文が付されていたのである。これはまた、全体のあらすじも示していた——とくに《ヨセフとその兄弟》の台本の場合には、その構想とストーリー展開の動機づけを理解するのにこの「公告」は不可欠のものであった。

一七四四年初め、『ザ・デイリー・ポスト』には次のような確信に満ちた予告が掲載された。

——特段の要望により——

ヘンデル氏は次の四旬節に予約に基づく十二回の演奏会を計画している。ここでは二つの新作（時間があれば旧作オラトリオのいくつか）を上演することを約束している。

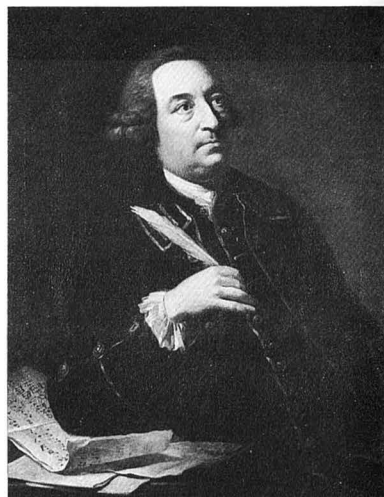
会場はコヴェント・ガーデンであった。ヘンデルの「新作」の第一は《セメレ》である。ジェネンズは彼の所有していたマナリグ著『故ジョージ・フレデリック・ヘンデル回想録』の写本に《セメレ》に関する辛辣なコメント——「オラトリオといえる代物ではなく、下品なオペラである……イギリス・オペラであるが、愚か者はオラトリオと呼び、オラトリオとしてコヴェント・ガーデンで上演された」——を自筆で書きこんでいる。

ヘンデルに変わらぬ関心を寄せていたディレイニー夫人は姉妹に宛てた一連の手紙の中で、この作品のリハーサルと初演および再演、それにヘンデルがこのシーズン中に上演したその他のオラトリオ



T. MORELL, S.T.P. S.S.A.

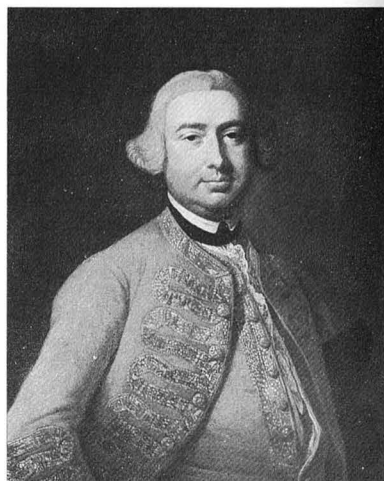
44 トーマス・モーレル師。1746年以降、ヘンデル専属の台本作家。《ユダス・マカベウス》、《アレクサンダー・パルス》、《イエフタ》などを手がける。



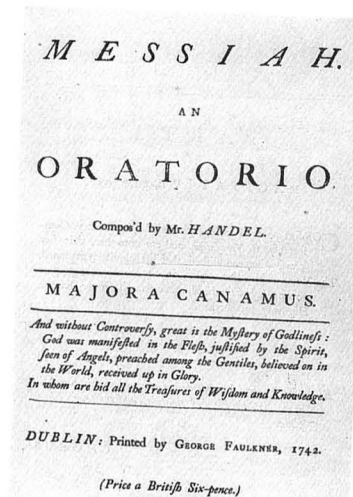
43 ジョン・クリストファー・スミス (子)。
ヘンデルの弟子、筆耕者、友人。



46 1752年、コヴェント・ガーデンにおける《サムソン》再演用の装飾チケット。



45 ジョン・ビード。当時のイギリスを代表するテノールの一人。何曲かのヘンデル・オラトリオにおけるテノール役は彼のために書かれたものである。1761年、リッチの跡を継いで、コヴェント・ガーデンの支配人となる。

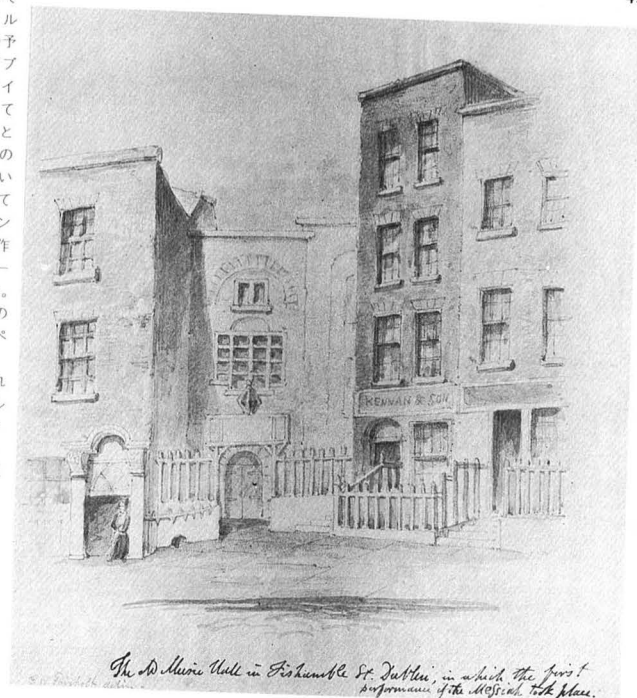


41

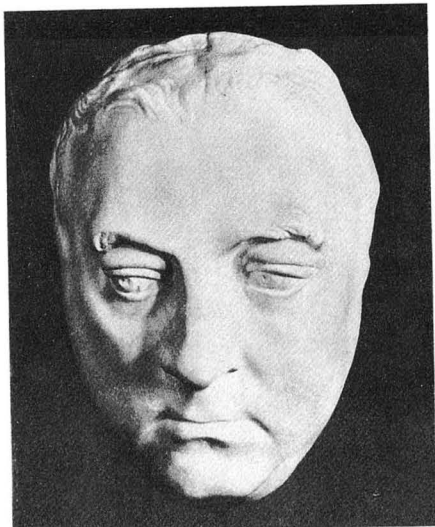


40

40-42 慈善演奏会を開いてみてはというアイルランド総督からの予期せぬ招待は、ダブリンの名を《メサイア》の初演地として世に知らしめることとなった。出演者の中にはシバ夫人もいた。悲劇女優としても有名だったスザンナ・マリア・シバは作曲家トーマス・アーン (子) の妹である。
41: 《メサイア》の台本のタイトル・ページ。
42: 新しく建てられたフィッツシャムブル街のミュージック・ホール (ダブリン)。《メサイア》はここで初演された。



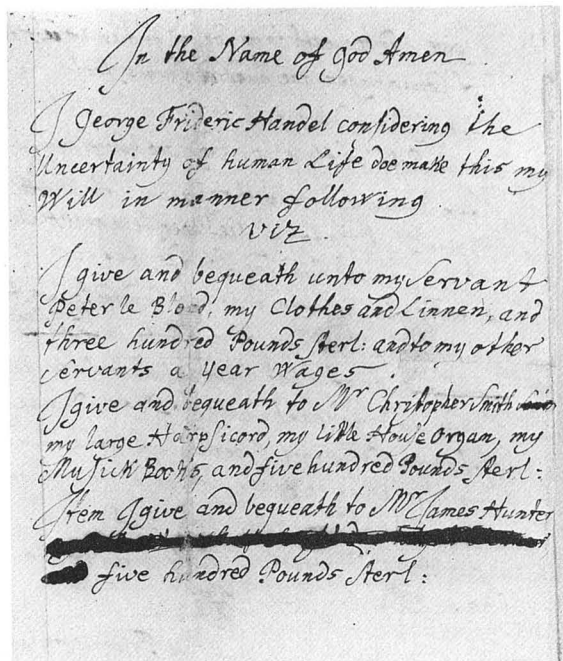
42



51 デスマスクの鑄形。ルビヤック作。現存せず。



50 ヘンデルの肖像画。18世紀イギリス派。ハドソン原画。



52 ヘンデルの遺書の私的コピーの第1ページ。筆跡は本人のもの。ジョン・クリストファー・スミス（父）への遺贈物の中には現在大英図書館所蔵の自筆譜集（『ミュージック・ブック』）が含まれていた。

Bridge on fire) to be paid by the Chamberlain of London on conviction of such Offender or Offenders. Guildhall, April 12, 1758. HODGES.

48 47

Hospital for the Maintenance and Education of exposed and deserted young Children.

THIS is to give Notice, that towards the Support of this Charity, the Sacred Oratorio, called, MESSIAH,

Will be performed in the Chapel of this Hospital, under the Direction of George Frederick Handel, Esq; on Thursday next, the 27th inst. at twelve o'clock at Noon precisely; and, to prevent the Chapel being crowded, no more Tickets will be delivered than it can conveniently hold; which are ready to be had of the Steward of the Hospital; at Arthur's Chocolate-house in St. James's Street; at Bosjan's Coffee-house in Cornhill; and at Tom's Coffee-house in Duncree Court, at Half a Guinea each. T. COLLINGWOOD, Secretary.

For the TEETH, Scurvy in the GUMS, and TOOTH-ACH.

TWO TINCTURES of known and established Reputation, which have been long successfully used by the Nobility and Gentry, both of this Kingdom and of Ireland, and for which his Majesty has been pleased to grant his Royal Letters Patent, are sold by the Patentee THO. GRENOUGH, Apothecary, at the King's Arms and Pestle and Mortar in Luegate Street; and by J. NEWBERRY at the Bell in the



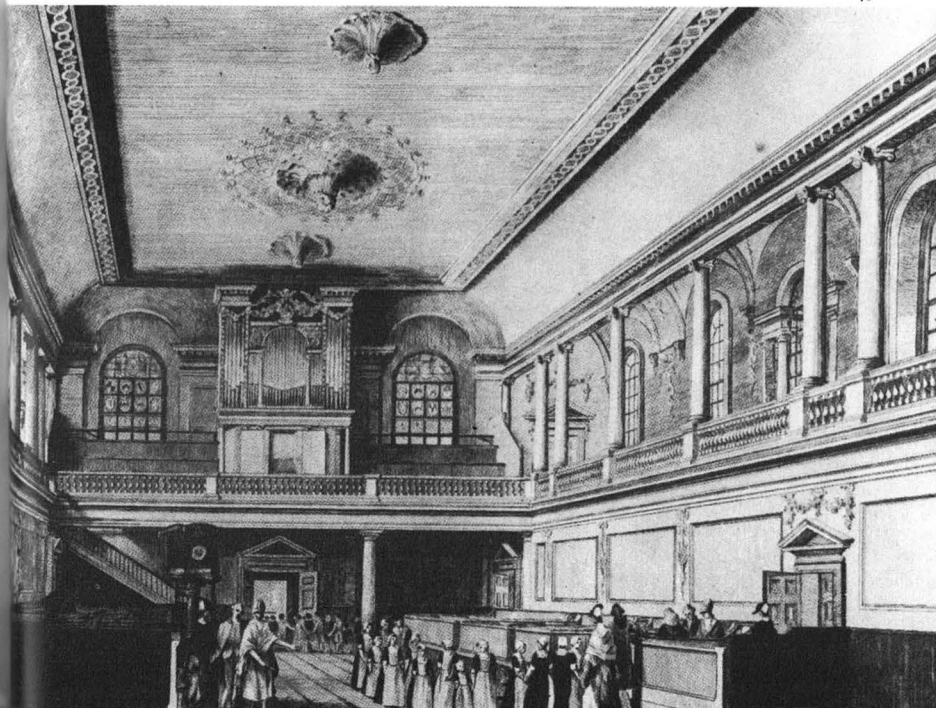
47-49 <メサイア>が1750年以降、毎年捨て子養育院で演奏されるようになったのはヘンデルの寛大な援助の賜物であった。

47: 養育院の創設者トーマス・コラム。

48: 1758年の<メサイア>上演の新聞広告。

49: <メサイア>の上演された養育院礼拝堂。

49



このイヴェントの本番はさほど幸先良いものではなかった。ジョン・バイロムは「グリーン・パーク、木曜の晩、七時、花火の城の前にて」と記した妻宛ての手紙で、その情景を生き生きと述べている。

様子を見ようとここらあたりを歩き回り、なにかに邪魔されないうちにあなたに一筆認めようと木の切り株へと腰をおろしたところで……人々は皆、様々な感謝の催し、ヴェネツィア風の祭り、イタリア式花火、ドイツ風の山車などで大騒ぎしています。私は後にも先にもこれほどの群衆を見たことはありません。

この祝祭のために建てられた建物は、見た目にもとてもすっきりと美しく、立派で、大規模な花火が一斉に点火されると、極めて見事な光景が浮かび上がるようにセットされています。国王以下、多くの要人達はこの仕掛けを見に女王図書館の前^{註33}に歩いて行きました。その辺りは柵で囲われており、その足場の下に座っている紳士淑女や庶民達は、自由な空気を満喫しながら歩き回っている身軽な我々から見ると、まるで監禁されているように見えました。

とても暑い日だったのに、今は雨が降り出しそうなどんよりとした暗い雲におおわれており、そろそろ引き上げた方が良さそうです。今、書いている間にも、ポツポツと雨が落ち始め、本降りになりそうな雲行きです。雨雲が去ってくれないと、楽しみは台無しになりそうです。もし晴れてくれれば、セント・ジェイムズ・パークの木の下に場所を確保するつもりです。そこなら花火は目の前だし、もしロケット花火の尾が落ちてきても、木の枝がその下に避難している者達に被害が及ぶのを防いでくれます。だから、雨からも火の雨からも逃れるために、これから近くの木の下に避難

しようと思っています。

しかし、ショーは期待外れだった。五月三日、ウォルポールはサー・ホレイス・マンに宛てた手紙に書いている。「ロケット花火や、空中に打ち上げられたものはすべて非常にうまくいった。しかし、回転花火やその他肝心な部分を構成している花火のすべては情けないほどうまく作動せず、炎の色や形が変化しなかった。花火の光も貧弱で、点灯が緩慢なために最後まで忍耐強く待つ者はほとんどいなかった。その上、右側のパビリオンに火がつき、ショーの真最中に焼け落ちてしまった。このことも全体の不手際に拍車をかけた」と。

この事故は、気性の激しい設計者セルヴァンドーニにとって我慢ならなかった。彼は可哀そうなチャールズ・フレデリックに向かって、「花火の監督官」の職務において著しい醜態を演じたと言って非難した。音楽は花火の最中ではなく、明らかにそれ以前に、多分、王室の団が仕掛けを見学している間に演奏されたが、演奏についてはなにも言及されていない。無視されることに不慣れたヘンデルは、一ヶ月もしないうちに、全く異なる機会でこの曲を再度演奏する計画を立てた。

捨子養育院

かつては船長を務めていたトーマス・コラムという人物が、何年もの間、ヴェネツィアのオスベダーリと同じ主旨で、「捨てられ、置き去りにされた子供達を受け容れ、養い、教育するための」収容施設を設立すべく、計画を練っていた。一七三九年に王室より捨子養育院設立のための認可^(図版47・49)が下りると、一七四二年、ラムズ・コンジュイット・フィールズに用地を得て、建設が始められた。

コーラムはホガース（理事）、ハドソン、レイノルズ、ラムジー、ウィルソンといった多くの芸術家達の支持を得ていた。一七四九年五月九日の養育院記録は、ヘンデルが礼拝堂完成資金を得るための演奏会の開催を申し出たことに對して、謝意を表明している。ジョージ二世はすでに三千ポンドを寄附し、ヘンデルを理事にするよう推薦している。この音楽会と同礼拝堂で開かれたが、このときまだ完成していなかったために「窓枠が取り付けられ、演奏会として使いやすく整えられた」。プログラムは「先の王宮の花火の音楽」、《ソロモン》の中から神殿奉献に関連する部分の抜粋、それに新しいアンセム（捨子養育院アンセム）へ貧しき者を顧みる者は幸いである *Blessed are they that consider the poor* が含まれていた。国王は二千ポンドを贈り、チケットは半ギニーで売られた。なんとか詰め込んで千人を超える人々が入場することができた。『ザ・ジェントルマンズ・マガジン』はさらに「寄附金集めはなかった」と記している。

この捨子養育院とヘンデルとの関係はこれ以後、彼がその生涯を終えるまで続いた。翌年、礼拝堂が完成すると、彼はバーネットのモース製作によるオルガンを寄贈した。この楽器は今では所在不明だが、鍵盤だけはトーマス・コーラム財団に保管されている。九月三十日にヘンデルがジェネンズに宛てた忠告の手紙を読むと、オルガン設計に見る彼の実益主義が浮かび上がってくる。ジェネンズはここ、ゴブソールの豪華な邸にオルガンを建設中だったのである。

昨日あなたからの手紙を拝読しました。その返事として、オルガンについての私の意見を以下に示します。それはあなたのお尋ねの主旨に叶うものと考えています。たとえリード・ストップがなくとも、立派な良いオルガンに必要なものはすべて満たされます。リード・ストップを省きました

のは、それがついていると常に調律の必要が生じるからで、田舎ではとても不便なのです。こんな理由から使われないままになってしまえば、あなたの意向とは異なるかもしれないかもしれませんが、それはもっと高価な買い物になってしまいます。ブリッヅ氏は申し分なく大変立派なオルガン製作者だと思えます。^{註97}（彼がそれを完成した晩には、喜んで私の意見を述べさせて頂きます。フリーマン氏のオルガンのフルート・ストップは、その種のものの中では大変素晴らしいものであるとあなたにお話したことがあります。しかし、オルガンそのものについてはお話してありませんので、次に私のお薦めるオルガンの構造について記します。つまり、

音域は上は d''' まで、下は G' まで

フル・オクターヴ

教会用

一段鍵盤

全音域ストップ

分割ストップは一本もなし

ストップ

開管ディアパソン（八フィート）——メタル製ですべて前面

閉管ディアパソン（八フィート）——トレブルはメタル製、バスは木製

プリンシパル（四フィート）——すべてメタル製

十二度低音ストップ——すべてメタル製

十五度低音ストップ——すべてメタル製

グレイト・ティアス——すべてメタル製

フルート・ストップ（ハフイート）——フリーマン所有のオルガンと同じもの

このオルガンはジェネンズの死後、ウォーリックシャーのグレイト・パッキントンのセント・ジェイムズ教会に移された。後に調整、改造され、現在でも同教会で使用されている。

夏の祝典に精力を注いだため、ヘンデルは翌年上演するためのオラトリオを一曲しか作ることができなかった。一七四七年から四八年にかけては、軍隊的な華やかさという視点からのオラトリオを四曲作曲して、ヘンデルは王室への義理を果たした。

翌年、ヘンデルは黄金時代と自然の穏やかさという対の観点から、自分自身の信仰の世界へと歩み寄っていった。一七四九年の六月から七月に作曲された《テオドラ》^{註98} Theodora は、あるキリスト者の運命の中に個人的な信仰を描いたものである。気高さ、誠実、犠牲的行為、そして最後の殉教が軍隊の騒々しいヒロイズムとは全く異質な勇気の一面として示されている。ヘンデルはキリスト教も異教ともに等しく生き生きと、魅力的に描いている——テオドラの献身と敬虔は彼女の若々しい情熱と初々しい信仰から生まれたものである——そしてキリスト教こそ道徳的に好ましいものであることを強調するのである。

この拮抗した苦闘の末に、「傷負いし崇高性」^{註99}（ウィントン・ディーンの非の打ちどころのない表現）という、このオラトリオの最終的な曲調が展開されていく。これは《マタイ受難曲》の最終部分にも匹敵するものである。

その年の冬、ヘンデルは異例の注文を受けた。ヘンデルはロンドンの劇場と密接な関係をもっていたが、劇の付随音楽はほとんど書いたことがなかった。ところが、ジョン・リッチからスモレットの《アルチエステ Alceste》のためのアリアと舞曲を作曲するよう依頼されたのである。ホーキンズによれば、リッチがこれを企てたのは、ヘンデルに借金を返済させるためだった——もどかしい話ではあるが、この件についてはこれ以上の詳細は不明である。

スモレット自身が二月十四日の手紙の中で語るところによれば、この上演は「イギリスでかつて見られなかったほどの素晴らしい舞台背景（セルヴァンドーニ製作による）」をもち、贅を尽くしたもの

となるはずだった。音楽には明らかにフランスの影響が窺われ、祝祭の

場面、連続する二つの夢の場面（第一の夢の場面でヘンデルの眠りのアリア

の中でも最高のもののひとつ、へやさしいモルベウス^{註100} Gentle Morpheus が歌わ

れる）、それに黄泉^{ユミ}の国の憂鬱な場面などに付けられたヘンデルの音楽は、彼自身の語法を用いて、ラモーに勝るとも劣らないものである。

結果的にこの作品の上演は実現しなかった。その理由は、おそらく、

Theodora.

An
Oratorio.

I intend to perform this Oratorio at the
Theatre Royal in Covent Garden
George Frideric Handel

《テオドラ》の手書き台本のタイトル・ページ。
舞台検閲官提出用にヘンデルが記入。

「作者と支配人との間で諍いがあったため」と、二月に起こった一連の地震によって惹き起こされた広汎なパニックのためであろう。多くの人々がロンドンから逃げ去った。「人々は、怖いからではありません、こんなに天気が良いのですから、どうしたって田舎に行きたくなります、閑下。と言っている」とはウォルポールの言葉である。モンタギュー夫人はもっと勇敢に、姉妹に宛てた手紙^{註10}の中で述べている。

地震のことはなにも心配せず、その夜はオラトリオに出かけ、静かにベッドに入りました。しかし、群衆の狼狽ぶりは大変なものでした。次の土曜にカード遊びをしようと誘った人々のうち、五十人近くが巻き込まれるのを避けて、町を離れました。それは私がお招きした人数の三分の一になると思います。このことから恐怖がどれほど広まっているか、想像がつくことでしょう。水曜の夜のオラトリオは、^{註10}ヘンデルの作品中でも最も人気の高いものであったにもかかわらず、ガラガラでした。

一七四九年の《テオドラ》は誠に不幸なことに人々から見捨てられた。だから、彼はチケットや入場優待券をもらってくれるお偉方がいるだけで喜んでいたが、誰も劇場に足を運ばなかった。二人の紳士（今なお存命中）がこうした《テオドラ》の不人気の後で、ヘンデルに《メサイア》の優待券を申し込むと、彼はこう叫んだ。「おお、下賤の者、なんということをや！ いまいいやかまし屋め！ 《テオドラ》には来ようとしなかったではないか――

あれが上演されたときはそこでダンスができるほど（ガラガラ）だったというのに」。

しかし、時には、彼が達観したように機嫌良く、友人達に気安めを言うのを耳にしたこともある。幕が上がる前、劇場がガラガラなのを彼らが嘆くと、ヘンデルはこう言った。「ご心配なく。その分響きが良くなることだろう」。

（チャールズ・バーニー、一七八五年）

《テオドラ》がこのパニックから立ち直ることはなかった。モーレルは一七七〇年ごろの手紙に、この作品に対するヘンデル自身の高い評価と、相も変わらぬヘンデルの鋭いユーモアを書き留めている。

……《メサイア》のグランド・コーラスを自分の傑作と思わないか、とヘンデルに尋ねたことがある。すると彼は「いや、《テオドラ》第二部の終わりに出てくる合唱（彼は愛らしい若者を見そなわし He saw the lovely youth）の方がはるかに優れていると思う」と答えた。

《テオドラ》の第二夜はアメリカ王女が臨席していたものの、聴衆は本当にまばらだった。その晩は赤字だと思ったので、いつものようにヘンデル氏のところに行かなかった。しかし、彼が笑っているの、思い切ってそばへ行ってみた。すると彼は「次の金曜日の晩も来ないかね、そうすれば、あなたのために演奏しよう」と言うのである。私はヘンデルに、たった今サー・ハンキーに会ったところ、「彼は、あなたがその曲をもう一度上演するなら、ボックス席をすべて予約したいと言っている」と告げた。するとヘンデルは「馬鹿な男だ。このオラトリオはクリスチャンの物語な

のだから《ユダス・マカベウス》のときのようにユダヤ人達がくるはずがないし、貞淑な物語なのだからご婦人方もくるはずがない」と言った。

ヘンデルがロンドン塔の火砲局管理人に宛てて書いたメモを見ると、彼はこの年のオラトリオ・シリーズ用に「砲兵隊のケトル・ドラム」を使用する許可を得たことが分かる。《サウル》や《ユダス・マカベウス》が何回かず再演され、《メサイア》も一回再演された。カストラートのガエターノ・グアダーニがロンドンにデビューしたのもこのときだった。彼に対するバーニーの評価は「粗野で無神経な歌手」だったが、ヘンデルは彼のコロラトゥーラの技巧に感心し、〈御身は高き所にのぼり Thou art gone up on high〉、〈やれど彼のきたり給う日に誰が耐えることをえんや？〉を手直しするほどだった。「金を吹き分ける者の火 refiner's fire」を派手に演出したこの異稿は、コロラトゥーラが過重負担となるようなバス歌手には全く不適なものである。

劇場を離れて、五月一日に行われた《メサイア》上演は、捨子養育院のオルガンの弾き初めとなった。しかし、この楽器は完全にはでき上がっていなかった。モースは「合唱に対応するよう、ストップをできる限り増やす」ようにせがまれていた。印刷された招待状には「殿方は剣を持たずに、一方ご婦人方はフープを付けずにご来場願いたい」と書かれていた。それでもなお、入り切れない人が多数あった。『ザ・ジェネラル・アドヴァタイザー』によれば、無料で入場した「著名人達」がその原因だった。

ヘンデルは《メサイア》を五月十五日にも捨子養育院で再演することにした。この二回の上演の間にヘンデルは理事に選ばれ、以降、トーマス・コーラム財団のために《メサイア》の演奏会を毎年開

(図版48)
いている。バーニーの言葉を借りれば、《メサイア》は「国の内外を問わず、いかなる音楽作品も及ばぬほど、飢える者には食物を、裸の者には衣服を与え、孤児を養育し、代々のオラトリオ支配人を金持ちにした」。

この状況の根幹にあるものは、ヘンデルの営業的というより慈善的な発意であるとするのが妥当である。この財団は今でもロンドンに存在し、発展している。残念なことに、ヘンデルが演奏した礼拝堂、《メサイア》を上演し続けることを願って、遺言により《メサイア》のスコアとパート譜を寄贈したその礼拝堂は、一九二六年という最近になって、危険との宣告を下され、取り壊されてしまった。この大都市で、彼が演奏会を実施した中で一番最後まで残っていた建物がこの礼拝堂だった。その跡地近くには今でもヘンデル街(WC1)が残っている。

捨子養育院での二回目の《メサイア》上演から数日後、ヘンデルの過去から甦った亡霊が現れ、彼をぞっとさせた。高齢と貧しさによる衰弱でほとんど声も出なくなったクッツォーニがかつての栄光の舞台を訪れ、五月十八日にヒックフォード・ルームで慈善演奏会を開いたのである。その後間もなく、彼女は三十ポンドの借金のために投獄されたが、ウォルポールによれば、ウェールズ皇太子のおかげで釈放されている。翌年彼女が開いた演奏会では《ジュリーリオ・チエザレ》からの愛の二重唱、《オットーネ》からの三つのアリア、それに当時の趣味に合わせた《サムソン》からのアリア〈戻れ、万軍の主 Return, O God of Hosts〉が取り上げられた。

『ザ・ジェネラル・アドヴァタイザー』への手紙の中で、彼女は貴族や上流階級の人々の過去の愛顧に対して謝意を表し、この演奏会は「皆様にお世話をおかけする最後のものとなりました。この唯一の目的は債権者の方々に借金を返済することにあります」と明言している。しかし、バーニーは

「会場にはほとんど客がいなかった」と述べている。彼女はとうとう「来たときよりも、もっと惨めになって」この国を去っていった。そして、ボローニャでボタン作りをしながら、貧困の中でこの世を去った。

クッツォーニの最後のステージについてのバーニーの記述は、一面的なものかもしれない。大英図書館所蔵のマナリングの写本への書き込みには、「一七五〇年当時の彼女の声は、老婦人ではあったが、天使と謳われたリンリー婦人の最盛期に匹敵するものだった……」と記されている。

失明——《イエフタ》

ヘンデルの健康状態はその経済状態と並行して回復していた。この年の初め、シャフツベリー伯爵はジェイムズ・ハリスに次のように報告している。「こちらに来てから何回となくヘンデルを見かけました。あれほど落ち着いて元気な彼を見たことがありません。彼は行動もとても穏やかで、美しい絵、それもとて高価な大きなレンブラントの絵を買って楽しんでます。我々は音楽のことはめったに話題にしません。彼の作品の上演は昔とは比べべくもなく少なくなっていくことを承知してはいましたけれど」。

その夏、ヘンデルはドイツに向けて出発した。それに先立って、用心のために遺言を書いている。行き先については——アーヘンで温泉につかったのか、親戚を訪ねたのか——なにも分かっていない。この旅行を証明するものは『ザ・ジェネラル・アドヴァタイザー』に掲載された馬車の事故に関する思いがけない記事^{註104}だけである。

「過日、友人を訪ねてドイツへ行ったヘンデル氏は、ハーグとハーレムの間で馬車が転覆するという

災難に遭い、重傷を負ったが、現在は危機的状況を脱している」。

負傷が事実としても、ヘンデルは十二月二十五日付の旧友テレマンに宛てた手紙ではそのことになにも触れていない。二人が初めて会ったのはほとんど五十年前のことであるが、ヘンデルは（相手がドイツ人だというのに）礼儀正しくフランス語の手紙を書いているし、テレマンが珍しいチューリッブ、ヒヤシンス、アネモネなどの精選されたコレクションを持ち、植物マニアとしても有名なことを忘れずにいる。

ハーグからロンドンへ向けてちょうど出発しようというときに、パッセリーニ氏があなたからの大変嬉しいお便りを届けてくれました。ちょうど、彼の妻の歌を聞くだけの時間がとれました……。

音程の機構に関するあなたの素晴らしい研究を、ご親切にもお送り頂き、有難うございます。時間と労力をかけただけの価値があり、また、あなたの学識に見合った著作だと思えます。

いくぶんお年を召されましたが、大変お健やかでいらっしゃることをお慶び申し上げます。いつでも益々ご清栄でありますよう、心からお祈り申し上げます。当然のことではありますが、もし、珍しい植物などへの情熱があなたの人生を長くし、人生の楽しみを支えるのであれば、喜んでいくらかでもそのお役に立ちたいと思います。そのような訳で、プレゼントに花かごを（同封の住所宛てに）お送りします。専門家達は、その花が選りぬぎの見事な珍品であることを保証しています。もし彼等の言葉が真実でないとしても、あなたは「少なくとも」イギリス中で最高の植物を手に入れることになりましょうし、この季節はまだ花をつけるのに適しています。こんなことはあなたが一番良くご存知とは思いますが……。